

大谷大学史研究—その淵源と継承—	1
2024年度「特定・指定研究」資料室研究組織一覧	2
2024年度「指定研究」等研究目的紹介	4
2024年度「一般研究」等組織一覧	12
2024年度「一般研究」(新規採択課題)研究目的紹介	16
2024年度東京分室PD研究員個人研究 研究目的紹介	22
公開研究会報告	23
海外研究調査報告	24
歎異抄ワークショップ参加報告	29
彙報	31

研究所報

大谷大学史研究—その淵源と継承—

大学史研究・研究代表者 藤元雅文

第三代学長佐々木月樵が、1925年に「大谷大学樹立の精神」を表明してから、本年（2025年）は百周年となる。当時、佐々木学長が掲げた大学の理念から、現在の大学はどのように問いかけられているであろうか。真宗総合研究所（以下、真総研と略）の指定研究「大学史研究」は、その問いに深く関わる、かつその問いに応答すべき願いがかけられている研究班であるといえよう。

現「大学史研究」の淵源は、真総研設立にまでさかのぼることができる。真総研は1981年6月1日に発足した。「真宗総合研究」と題された研究会の初回は、同年9月17日に「大正デモクラシーと真宗」（鈴木幹雄・倫理学）という題で行われたことが分かる。さらに同月には「近代化批判と大谷大学」（武田武磨・宗教学）、「教団の経済基盤」（藤島建樹・東洋史学）というテーマの研究発表が行われ、これ以降、月に3～4回程度の研究例会が開催されている（以上、『研究所報』No.1）。さらに、これらの研究活動が「真宗総合研究」の総合課題「近代における真宗の展開」をテーマとした指定研究として取り組まれていることも確認することができる（『研究所報』No.2）。

その後、上記の研究課題に端を発した指定研究は、「真宗学事研究」、「大学史編纂研究」、「大谷大学近代史研究」、「清沢満之研究」と展開した。また、大谷大学近代化百周年を期として、『大谷大学百年史』（2001年10月）、『清沢満之全集』9巻（2003年7月）など重要な成果を生み出してきた。2004年から2007年までは指定研究「大学史研究」が設置され、その研究課題を「大学史関係資料の収集・整理・公開」と明記している。この期間には、「大学史研究」の目的の一つに、佐々木月樵研究が明確に位置付けられ、そこでの佐々木月樵にかかわる成果が現在の特定研究「大谷大学樹立の精神」100年」に受け継がれている。

また、2008年からは研究所主事が研究代表となる「大谷大学史資料室」が「大学史関係資料の収集・整理・公開」という課題を継続し、一方で2014年度に

は「清沢満之研究」が指定研究として再度設置された。2024年度、現在の一楽真学長の指示によって、あらためて「大学史研究」が指定研究として発足し、「大谷大学史資料室」が取り組んできた課題とともに「清沢満之研究」もその中に包摂される形となっている。

以上、真総研設立当初から現在の「大学史研究」につらなる指定研究の動向を粗々と見てきた。そのうえで「大学史研究」の淵源と継承の意義を確かめたい。真総研設立の意義について当時の廣瀬果学長は「教育と研究の資質を常に向上せしめるとともに、教育と研究との相関々係を限りなく密接にして行くための努力が、大学自体の責任に於て具体的に促進されなくてはならない」（『研究所報』No.1）と述べている。この言葉から、大谷大学に真総研を附置する理由は、本学の教育と研究とが、密接に関係しあい、時には相互の批判吟味を含めた緊張感を失うことなく、大学自身の責任において教育と研究を進めていくことを実現する所にあると理解できる。このことは、大谷大学が「自分自身を見究める眼を自分自身のうちに確保したこと」（同上）と真総研設置の意義を述べていることから明らかであろう。さらに、ここで言われる大学「自身を見究める」視座を佐々木学長の「大谷大学樹立の精神」において確認したい。佐々木学長は「真宗は真をこれ主義とする所の仏教である。真は一般に学の対象たるのみならず、本学に於ては、またこれ人格陶冶の最後のモットーである」と述べている。ここに表現される真宗、仏教とは、「真」を探究する「学」のいとなみを不断の歩みとして要請するものであろう。どのような現実の中にあろうとも、その現場にむきあいつつ、一人ひとりの生の根本にかかわる課題、つまり「真（まこと）の宗（むね）」（ほんとうのよりどころ）を探究する人を育成する大学であるかどうか、本学の教育と研究はその視点から問われている。このことを大学史研究の淵源と継承の意義として心に刻んでおきたい。

2024（令和6）年度「特定・指定研究」「資料室」研究組織一覧

【特定研究】

研究名	研究課題及び研究組織	
「大谷大学樹立の精神」100年 研究代表者 一楽 真（学長）	研究課題	佐々木月樵が「大谷大学樹立の精神」に込めた願いとその背景を尋ねる
	研究員	戸次 顕彰（講師・仏教学） 大 艸 啓（講師・日本古代史）
	嘱託研究員	西 本 祐 攝（准教授・真宗学）
	研究補助員(RA)	巖 城 大 空（博士後期課程第1学年）

【指定研究】

研究名	研究課題及び研究組織	
国際仏教研究 研究代表者 井上 尚実	研究課題	欧米諸国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開
	研究員	井上 尚実（教授・真宗学） Michael J. Conway（准教授・真宗学） 木 越 康（教授・真宗学） Dash Shobha Rani（教授・仏教学） Ama Michihiro（准教授・アメリカ宗教・文化／国際日本学） 新田 智通（准教授・仏教学）
	嘱託研究員	Mark L. Blum（カリフォルニア大学バークレー校教授） Wayne S. Yokoyama（元花園大学講師） 羽田 信生（毎田周一センター所長） 矢崎 早枝子（グラスゴー大学教授）
	研究補助員(RA)	但馬 普（博士後期課程第2学年） Woo Jongin（博士後期課程第3学年）【2024.6.1付】
東アジア・北アジア仏教研究 研究代表者 松川 節	研究課題	仏教を基軸とする東アジア・北アジア学術研究ネットワークの構築
	研究員	松川 節（教授・人文情報学・東洋史学） 井 黒 忍（准教授・東洋史学） 松 浦 典 弘（教授・東洋史学）
	嘱託研究員	箕 浦 暁 雄（本学教授・仏教学） 宗 周太郎（本学任期制助教・東洋史学） S. ヤンジンスレン（モンゴル国立大学講師） N. アムガラン（モンゴル国ガンダン寺院学術文化研究所研究員）
		【後期のみ】 A. ボルマー（神戸市立外国語大学非常勤講師・研究員）【後期のみ】

大学史研究 研究代表者 藤元雅文	研究課題 大学史関係資料の収集・整理・管理・保管・研究および清沢満之研究 研究員 藤元雅文 (准教授・真宗学) 采翠晃 (教授・仏教学) 西尾浩二 (准教授・哲学) 嘱託研究員 西本祐攝 (本学准教授・真宗学) 藤井了興 (本学任期制助教・真宗学) 名畑直日兎 (真宗大谷派教学研究研究所研究員 ~2024.7.31) 研究補助員(RA) 山雄優生 (博士後期課程第3学年) 【2024.6.1付】
仏教写本研究 研究代表者 Dash Shobha Rani	研究課題 パーリ語貝葉写本の研究 ー保存、整理、情報収集およびネットワーク構築を中心にー 研究員 Dash Shobha Rani (教授・仏教学) 戸次顕彰 (講師・仏教学) 江森英世 (教授・数学教育学) 新田智通 (准教授・仏教学) 嘱託研究員 Suchada Srisetthaworakul (マヒドン大学講師・古典写本研究センター・センター長〈タイ・アユタヤ〉) Anand Mishra (ハイデルベルク大学)
チベット文献研究 研究代表者 三宅伸一郎	研究課題 大谷大学所蔵チベット語文献の研究 研究員 三宅伸一郎 (教授・チベット学) 嘱託研究員 上野牧生 (准教授・仏教学) 伴真一郎 (2023年度チベット文献研究嘱託研究員)
宗教・社会研究 研究代表者 後藤晴子	研究課題 宗教と社会の関係をめぐる総合的研究 ー社会的なものとしての宗教ー 研究員 後藤晴子 (東京分室長・准教授・社会学) PD研究員 磯部美紀 (PD研究員・社会学) 澤崎瑞央 (PD研究員・仏教学) 高橋泉 (PD研究員・教育学) 鶴留正智 (PD研究員・真宗学) 藤井麻央 (PD研究員・宗教学)

【資料室】

名 称	研究課題及び研究組織
デジタル・アーカイブ 資料室	研究課題 大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築 室 長 箕浦暁雄 (研究所主事・教授・仏教学) 嘱託研究員 川端泰幸 (博物館主事・准教授・日本中世史)

2024（令和6）年度「指定研究」等研究目的紹介

特定研究「大谷大学樹立の精神」100年

佐々木月樵が「大谷大学樹立の精神」に込めた願いとその背景を尋ねる

研究代表者・教授 一楽 真
(真宗学)

大谷大学は1922（大正11）年に大学令による大学として認可された。大学令が出されたのが1918年であるから、いち早く認可を受けた大学の一つである。そして、校名も「真宗大谷大学」から「大谷大学」へと改めた。その大谷大学が誕生した2年後の1924年に第3代学長に就任した佐々木月樵は、翌1925年の入学宣誓式において、「大谷大学樹立の精神」という講演を行い、大学令に基づく大谷大学としての使命を述べる。この言葉は初代学長清沢満之の「真宗大学開校の辞」と併せて、本学の建学の精神として位置づけられている。

2025年は、「大谷大学樹立の精神」が発表されてからちょうど100年の節目となる。100周年を迎えるにあたり、「大谷大学樹立の精神」に込められた佐々木月樵の願いをあらためて確かめていくことが本研究班の大きな目的である。

この目的を達成するためには、まず佐々木の生涯や著述活動の全体像を把握することが必須となる。佐々木月樵の著作に関しては、すでに『佐々木月樵全集』（全6巻）にまとめられているが、そこに収載されているものは著作などのごく一部であり、論文やエッセイ等の収載されていないものが多く残されている。

本研究班では、『佐々木月樵全集』に収められていない著作について、それらを収集してデータ化し、その一つひとつについて校正・読解・検討する作業から始めている。幸いなことには、すでに2006年度「大学史研究班」によって佐々木に関する文献はかなり収集されており、そのリストも残されている（そのリストによれば、592点の論文・エッセイなどが確認できる）。本研究班においては、まず「大学史研究班」によって作成されたリストをあらためて精査・整理し、収集されていない文献についてはそれらを収集し、すでに収集されている文献についてはデータ化して校正していく作業をおこなっている。そのうえで、データ化し校正が完了したものを順次何らかの手段によって

共有していくことも検討していきたい。

現在は佐々木の著述について、雑誌等での初出の原稿と、その後著作として刊行されたもの、あるいは全集に収まっているもの、これらの相関関係の調査にも着手している。これら初出と著作と全集との相関関係を見ていくことによって、佐々木の加筆・修正の足跡の有無をたどることが課題となっている。

本研究班はこうした諸作業を経て、佐々木の生涯にわたる著述活動およびその内容の全体像の把握を目指す。そのうえで、特に「樹立の精神」に関する文献や、欧米視察に関する文献について、特に注意深く検討を進めていきたい。「樹立の精神」に関する文献は、それらに注目することによって「樹立の精神」が発表された背景を明らかにすることにつながると考えられる。

また、「樹立の精神」には欧米の大学の様子も記されている。佐々木は1921年に、以前より親交のあった沢柳政太郎を団長とする文部省の欧米視察団の一員として同行し、約一ヶ月間、欧米の宗教・教育事情を視察した。「樹立の精神」には、佐々木が実際にヨーロッパおよびアメリカの教育事情を視察したことに基づく知見が大きく反映されており、こうした背景があつて「樹立の精神」は出てきている。この点に注目することは、本学の建学の精神を確かめる作業にとどまらず、日本の教育史あるいは大学史における大谷大学の位置を確認することにも関係していくと考えられるのである。

最終的には、佐々木月樵の小伝、および「樹立の精神」を学生や教職員が学ぶための副読本の作成を目指したいが、本研究期間内では、そうした刊行物作成の基盤を整備することが主な目的となる。2年間の研究期間終了後も、教員や大学院生が中心となり、佐々木月樵研究を継続していける体制を整えていくことが研究期間内における本研究班の使命であると考えている。

また、2025年度は先にも述べたように「大谷大学樹立の精神」発表から100年の節目であるから、外部の有識者を交えた議論、あるいは研究発表の場を設けることも企画中である。

国際仏教研究

欧米諸国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開

研究代表者・教授 井上 尚実
(真宗学)

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。

仏教学・宗教学の分野における国際化はCOVID-19による大きな影響を受けた後もインターネットを活用しながら一層進んでおり、真宗学についても英語などの国際語による研究を視野にいれて研究成果を公開していかなければならない状況にある。そうした動向に対応すべく、海外の学術交流協定校などの研究機関および真宗大谷派北米開教区 Shinshu Center of America と協力して研究活動を進めていく。

本年度は具体的に以下のようなテーマで研究活動を行う。

活動内容

① 国際学会・ワークショップへの研究員の派遣

a) 『歎異抄』翻訳研究ワークショップ（2024年6月に京都の龍谷大学、2025年3月に米国カリフォルニア州バークレーで開催予定）に研究員と公募で選ばれた大学院生を派遣する。この国際ワークショップは、カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所・龍谷大学世界仏教文化研究センターと本研究所の学術交流協定に基づいて継続的に開催されている。

b) 国際真宗学会の第20回学術大会は2024年9月28日（土）から29日（日）にかけて開催される。数名の研究員を派遣し、個人発表を行うと共に、『歎異抄』翻訳研究ワークショップのプロジェクト概要を紹介するパネル発表を行う予定である。

c) インド北部における仏教の現状と動向を調査するため、2025年2月に研究員を派遣する予定である。

② 国際シンポジウムの成果出版

2023年12月15日（金）から17日（日）の3日間、本学を会場に ELTE 東アジア研究所との共催で国際シンポジウム “Enlightenment, Wisdom, and Transformation in the World’s Religious Traditions”（世界の宗教伝統におけるさとりと知恵と変容）を開催した。本年度は、その成果出版に向けて準備を進める。具体的には、成果出版の形態を決定し、企画書を作成し、出版社の選定を行う。その上、シンポジウム

の参加者に執筆を依頼する予定である。

③ 「女性と仏教」に関する国際的研究の継続

「女性と仏教」をテーマとする国際的な研究者との関係を開拓し、2019年度のワークショップに続くさらなるワークショップの開催に向けて準備を整える。「女性と仏教」をテーマとする研究データベースを作成し、インターネットでの公開を目指す。また、今まで収集した先行研究に基づいて得た新たな知見に関する論文を執筆し、『真宗総合研究所紀要』に掲載する。

④ Shinshu Center of America の英訳事業への協力

真宗大谷派北米開教区の Shinshu Center of America から出版される浄土真宗、特に大谷派関係の書籍の英文翻訳への協力。特に金子大榮師の『浄土の観念』の英訳を出版するために、校正作業を進める。

以上

東アジア・北アジア仏教研究

仏教を基軸とする東アジア・北アジア学術研究ネットワークの構築

研究代表者・教授 松川 節
(人文情報学・東洋史学)

本研究の意義と目的

国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を発信していくために、アジアにおける仏教研究の動向を把握するとともに、東アジア・北アジアにおいて本学が学術協定を締結している諸機関との共同研究ネットワークを強化し、本学が研究のハブとなってアジア仏教の研究を推進することを目的とする。

目標と期待される成果

①東アジア・北アジアにおける仏教研究の動向把握

本学が学術協定を締結してきた実績を有する中国社会科学院古代史研究所、モンゴル国立大学を中心に、学術交流を通して最新の仏教研究動向の調査研究を行う。具体的には、Ⅰ) 新型コロナ禍によって中断していた中国社会科学院古代史研究所との学術交流を復活させ、「中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化の研究」をテーマに双方の研究者が往来し共同研究を実施する。Ⅱ) モンゴル国立大学との共同研究「モンゴル仏教の起源に関する仏教学・歴史学・考古学的研究」を、双方の研究者が往来して共同で実施する。Ⅲ) 共同研究ネットワークを強化するために、中国（北京）故宮博物院図書館所蔵文献と本学図書館所蔵文献との比較共同研究、モンゴル国ガンダン寺学術文化研究所との共同研究「ガンダン寺所蔵文献と本学図書館所蔵文献の比較研究」を行う。

②本学が研究のハブとなってアジア仏教の研究を推進するために、東アジア・北アジア仏教史全般に関わる「釈迦如来梅檀瑞像」の伝播をテーマとして日本・中国・モンゴル国・ブリヤート共和国の研究者が共同研究を行い、2025年度に本学で国際シンポジウム「東アジア・北アジアにおける「釈迦如来梅檀瑞像」伝播の諸相の解明と東アジア・北アジア学術研究ネットワーク構築」を開催して成果を公開する。

③研究体制変更に伴い、前研究体制での研究項目Ⅰ)「中国古代史及び敦煌・トゥルファン文書研究」国際シンポジウム（2015年12月開催）の成果論文集の出版、Ⅱ)『日本仏教概説（ベトナム語版）』の出版、以上2点を実施する。

研究計画

2024年度

①中国社会科学院古代史研究所と本学との研究者往来による共同研究の実施を継続し、2024年6月に松川節・井黒忍研究員は北京に出張し、新型コロナ禍によって中断していた中国社会科学院古代史研究所との学術交流を復活させる。

②モンゴル国立大学と本学との研究者往来による共同研究・現地調査を行う。(S.ヤンジンズレン嘱託研究員を2024年11月に一週間程度招聘、N.アムガラン嘱託研究員を2025年2月に一週間程度招聘、松川研究員は2024年9月にモンゴル国にて現地調査を実施。)

③松川研究員は2024年9月にブリヤート共和国のロシア科学アカデミーシベリア支部モンゴル学・チベット学・仏教学研究を訪問し、「釈迦如来梅檀瑞像」についての共同研究を行う。

④「中国古代史及び敦煌・トゥルファン文書研究」国際シンポジウム（2015年12月開催）の成果論文集の出版、Ⅱ)『日本仏教概説（ベトナム語版）』の出版、以上2点を実施する。

大学史研究

大学史関係資料の収集・整理・管理・保管・研究および清沢満之研究

研究代表者・准教授 藤元 雅文
(真宗学)

本研究は、2023年度から大谷大学史資料室が取り組んできた内容を継承しつつ、「大学史研究」という研究名が示す通り、大谷大学史の研究に寄与することを目的として設置された。ただ、2023年度の大学史研究は過渡的な研究班という位置づけをしており、真宗総合研究所主事が研究代表をつとめる形となっていた。2024年度からは、大谷大学にかかわる資料の収集・整理・保存に取り組むことに加え、近年指定研究として取り組まれてきた清沢満之研究を大学史研究の中に位置づけ、これまでの清沢満之研究をもひきついでいく形での研究組織となった。したがって、以下、【大学史研究関係史資料】と【清沢満之研究】とに分けて記す。

【大学史研究関係史資料】

今年度の大谷大学史研究関係史資料の活動について、近年検討すべき点として大学の重要な史資料が電子データ化されてきており、そのような史資料をどのように収集・管理・保存するかという課題が存在している。大学史研究とは、本学がどのような大学なのかを確かめるための基礎研究であるが、そのための基礎作業として、大学にかかわる史資料を確実に収集・整理・管理・保存することは必須な取り組みである。

そのため、2024年度においては、既述のような史資料の変化をふまえて、本学にかかわる史資料の収集・整理・管理・保管について、まずはその方法の明確化を目指して、調査研究に取り組んでいる。

また、必要に応じて、大学史に関わる研究内容を有する特定研究「[大谷大学樹立の精神] 100年」と連携している。

具体的な取り組みとしては、以下6項目となる。

1. 未整理の大学史資料を整理、保存する。
2. 全国大学史資料協議会への参加をはじめとする、他大学の大学史に関係する組織と交流し情報交換する。
3. 整理した大学史資料を図書館などで公開する。
4. 大学史に関わる資料の収集・管理・保管体制の方法を検討する。
5. 4の目標を実現するため、他大学における史資料の取り扱いを調査する。

6. 必要に応じて特定研究「[大谷大学樹立の精神] 100年」と連携し、第三代学長佐々木月樵関連の資料の整理、収集、分析、公開を支援する。

【清沢満之研究】

本研究では、西方寺所蔵清沢満之自筆文献（以下、西方寺所蔵文献と略）の影印（36枚撮りフィルム248本分、総コマ数8500枚超）を所蔵しているが、『全集』及び、『全集』別巻、その他で公開済の文献はその3分の1程である。これは主に『全集』が清沢満之自身の著述を収録し、清沢満之の受講ノートや書籍からの抜書、索引等は収録しないという方針で編纂されたことによる。

本研究では、『全集』に掲載されていない西方寺所蔵文献の翻刻・校正を継続的に行っており、2016年度終了時には全文献の翻刻を済ませ、一次校正に進んでいる。2018年度～2020年度は『全集』別巻の刊行に専注したため、西方寺所蔵文献の校正を中断したが、2021年度～2023年度には校正を再開し、またその内容精査を行った。これら未公開文献の研究は、清沢満之の生涯と思想の研究に大きく資するものである。

上記の通り、本研究は、清沢満之の生涯と思想の研究を進める上で、重要な意義を持つ西方寺所蔵文献についての研究とその公開に向けた研究を進めている。

具体的には、次の2点を柱として研究活動を行っている。

1、西方寺所蔵文献（未公開分）の研究

2、西方寺所蔵文献（未公開分）の公開に向けた研究

西方寺所蔵文献の未公開分は、分量にして36枚撮りフィルム167本分、総文字数3,703,420字である。その中には、清沢満之の生涯全般にわたる文献を確認することができる。2021年度から2023年度までに、その全体について、分野、内容、執筆年代等の基礎的な確認・検討を行い、その全貌について精査する研究を進めた。2023年度までに目標としていた全文献の確認を終えたが、これらはあくまで基礎的研究であり、公開へ向けてはその確度を挙げていく研究が、次の段階として、まずは必要となる。その研究を踏まえた上で、公開可能な文献は、順次、研究所の機関誌等で公開していくことを目標とする。これらの研究であきらかにした成果については、これまで同様に西方寺と情報共有を行っていく。また、清沢満之の著述について、未収集文献を調査・収集する活動も継続していく。

大谷大学所蔵仏教写本研究

パーリ語貝葉写本の研究 —保存、整理、情報収集およびネットワーク構築を中心に—

研究代表者・教授 Dash Shobha Rani
(仏教学)

大谷大学には、パーリ語、サンスクリット語等で書かれた仏教に関する写本が数多く所蔵されている。その一部はある程度整理され、研究されているが、未整理で研究されていないものも多く残っている。

本研究は、主に三つの柱を立てて研究を行う。一つは、1995年に本学図書館によって出版された『大谷大学図書館所蔵 貝葉写本目録』（以下、『貝葉写本目録』）に登録されているパーリ語貝葉写本を取り上げ、その保存、整理と利便性、そして学術研究の準備を整えることを主な目標とする。そのため、貝葉写本の高度なデジタル化、上記の『貝葉写本目録』のデータベース構築、写本が包まれていたと思われる包み布の研究、関連資料の収集、ローマ字転写テキストや校訂本の作成、翻訳などを中心に作業を行う。そのために必要な資料を収集する。

二つ目は、写本とは単なる文字の集合体ではなく、それが作成された、または書写された地域・文化の様々な様相も含まれているため、写本の「総合的な研究」が求められる。そのため、本研究は、文献研究にとどまらず、写本研究に基づき、南アジア・東南アジアを中心にその文字、言語、文化、信仰などの国際的・学際的な研究を行うことを目的とする。加えて、仏教写本の特徴や性格をより明白に示すために、その他の対象写本と比較検討する。

三つ目は、写本研究を最新の情報に基づき行うため、関連資料の収集、共同研究の実施および研究者・研究機関とのネットワーク構築を目指す。研究者のネットワークを築くとともに本研究の視野を広げる目的で、海外の研究機関との学術交流を図り、それら研究機関の所蔵資料をも活用し、人材の協力を得る。写本や関連文献の研究を踏まえ、諸国における仏教文化や仏教の現状について研究することが可能になり、多角的な視点から仏教の受容性や現代におけるその意義を明らかにする。学術交流の一環として、交流先の研究者と本班の人材を生かして、共同研究・国際シンポジウムなどを開催し、その成果を出版物として公刊する。

研究活動及び成果の国際的な評価を目的として、本研究班の活動を海外の研究機関に向けて紹介し、成果

発表会を定期的に行い、英語での出版を目指す。そして、本研究は写本中心ではあるが、仏教思想、仏教文化という拡大した領域に亘って研究を行うため、研究者のみならず、一般の社会人も対象にして公開発表会を定期的に行い、成果の一部を社会に還元する予定である。

この目的を達成するために、2022年度から継続して2024年度において以下の研究活動を予定している。

(1) **高度なデジタル化**：貝葉写本の多角的な研究に役立つよう、本学所蔵貝葉写本の高度なデジタル化の補助およびデジタル化された資料の保存と整理を行う。

(2) **包み布の研究調査**：タイから贈られてきた貝葉写本が包まれていたと思われる包み布は現在63枚ある。コロナ禍の影響により中止になっていた本学所蔵貝葉写本の包み布の研究調査を再開する予定である。

(3) **『貝葉写本目録』のデジタル化**：写本のデジタル化にとどまらずに、これらの貝葉写本の詳細を便利に使えるよう『貝葉写本目録』もデジタル化する。そのため、データ入力・校閲作業を継続して行う。

(4) **ハイデルベルク大学との共同研究**：写本研究の総合的で新たな研究及び技術・知見の集積を目的として、ドイツのハイデルベルク大学の Department of Cultural and Religious History of South Asia と「Manuscriptology and Digital Humanities」（写本研究とデジタル人文学）という共同研究会のもと、国際ワークショップや研究発表会などを定期的に関催する。詳細は以下の URL から確認できる。

- <https://www.sai.uni-heidelberg.de/en/departments-and-branches/cultural-and-religious-history-of-south-asia-classical-indology/research/manuscriptology-and-digital-humanities> (ハイデルベルク大学)
- <https://www.otani.ac.jp/events/sfpjr70000011474.html> (大谷大学)

(5) **ネットワーク構築**：現在も宗教文化の一部として多くの写本を所蔵するタイとインドの協力機関、研究協力者とのアカデミックネットワークを構築する。本学との学術協定が成立している教育研究機関の協力を得て、本研究班の研究目的の達成のため学術交流・共同研究を図る。

(6) **ローマ字転写テキストの作成**：『貝葉写本目録』の写本のローマ字転写テキストを順次作成し、バリエーションを示す。

(7) **資料収集**：国内外の研究機関・所蔵機関より関連資料及び情報を収集する。

チベット文献研究

大谷大学所蔵チベット語文献の研究

研究代表者・教授 三宅 伸一郎
(チベット学)

大谷大学は北京版チベット大蔵経や貴重な蔵外文献などをはじめとする多数のチベット語文献を所蔵している。これらは、本学はもとより国内外のチベット研究のための重要な資料となっている。本研究は、これら本学所蔵の重要な文献資料を、専門の研究者が十分に活用できるような形で研究し、重要・貴重と思われるものについては公開することを目的としている。また、海外の研究機関との交流を通し、それら研究機関に所蔵されている貴重なチベット語の各写本・経典類や学術資源等の調査研究に取り組み、本学所蔵の各種資料との比較研究のための研究資源を形成することを目指す。

上記目的を達成するために、以下のチベット語文献の研究と公開を行う。

- (1) 蔵外 no.12767：『聖大集目連菩薩救母経（'Phags pa 'dus pa chen po byang chub sems dpa' mo'u 'gal gyi bus ma la phan btags pa'i mdo)』（写本・127葉）の研究

本経は、目連が地獄に堕ちた母を救う、いわゆる「目連救母説話」を内容とするものである。「経」と題され、翻訳者の名前も奥書に記載されていることから、サンスクリット語からの翻訳仏典を主張しているが、様々な点から考えて、明らかに「擬経」と考えられる。「目連救母説話」は、中国で成立したものであり、その意味で本経は、中国仏教とチベット仏教の交流を考える上で重要な資料である。同内容のテキストの所蔵は、国外の研究機関にごくわずかに見られ、しかも、公開はされていない。この貴重な文献の公開を目指し、2024年度は、2023年度に入力されたデータをもとに校訂テキストの作成に着手する。なお、校訂に際しては、校合に用いるべき校本が得られていないという状況にかんがみ、同じく「目連救母説話」を内容とする他の文献を参考にしつつも、基本的には、明らかな誤りと思われる部分を訂正・注記してゆくという方針を採りたい。

- (2) 蔵外 no.11841『プトン仏教史』の翻訳研究

本文献は、14世紀チベットを代表する学者プトン

＝リンチェンドゥブにより著されたもので、インド・チベット仏教史およびチベット大蔵経成立史を研究する上での基本資料として詳細な研究がなされてきた。しかし、その第1章仏教概説の部分は、14世紀チベットにおける仏教理解の一端を解明する上で必要不可欠な資料であるにもかかわらず、未だ詳細な研究はなされていない。その理由は、研究のための基本的な作業、すなわち校訂テキストや引用箇所と同定などがなされていなかったためである。この現状を鑑み、2022年に本研究班が公刊した校訂テキストに基づいて和訳研究を行う。2024年度は、2025年度の『研究所紀要』に成果を発表することを目指し、[釈尊の]御言葉(bka')の定義と語源を述べる箇所(校訂テキストのpp.56.6-64.3)の研究を行う。

- (3) 『モンゴル仏教史』の翻訳研究

2019年に本研究班が刊行したイエシエー・バルデン著『モンゴル仏教史・宝の数珠』（寺本婉雅旧蔵）を、そのモンゴル語版と対照し詳細な注を付した和訳研究を行う。2024年度は、その成果を『研究所紀要』で発表する。

宗教・社会研究

宗教と社会の関係をめぐる

総合的研究

—社会的なものとしての宗教—

研究代表者・准教授 後藤 晴子
(社会学／文化人類学／民俗学)

研究の目的：

多様な価値観を内包する現代社会において、様々な変化を強いられているなか、宗教のあり方もまた問われている。当然ながら、現代社会において、宗教が果たすべき役割やその可能性をより多角的な視点から見直すべきとの声も強まっている。そこで本研究は、宗教と社会との多種多様な関わり合いが見られる現代の東京・首都圏という場において、専門性を異にする研究員たちが各自のディシプリンに基づく独自の視点から、社会における宗教の役割を問い直すことを目的とする。

研究の目標：

人類にとって根本的な問いであり続ける、「どう生きるのか?」「どう死ぬのか?」という問題を主軸とし、宗教というフィルターを通して、社会に存在する、もしくは存在した様々な価値観の構造を明らかにすることを目指す。具体的なテーマとしては、生命倫理、死生観、道徳、優生思想、性差、人権、公害、秩序、政教分離、メディア、多文化共生などを取り上げ、宗教との関係性を考察する。各年度に上記テーマに関連した研究会を開催することで当該問題に関する理解を深めるとともに、シンポジウムを開催して広く研究成果を大学の内外に向けて発信する。本年度は、サブテーマ「社会的なものとしての宗教」を設定し、私たちと宗教の多様な関係のあり方について考察し、宗教の役割を解明していく。

2024 年度の研究計画：

2024 年度は「社会的なものとしての宗教」というサブテーマを設定して、私たちと宗教の多様な関係を考察し、現代社会における宗教の役割を解明していく。各研究員の研究計画は以下の通りである。

磯部研究員は、現代日本の葬儀において僧侶が果たしている役割について、僧侶・葬祭業者などの語りをもとに検討する。葬儀における宗教者の役割に着目することで、生者のみに留まらない、死者を含めた社会関係を考察する。

澤崎研究員は、新たな人間像として示された「菩薩」に着目し、仏教文献に示される仏教徒の生き方の具体的内容を解明する。加えて、現代社会における文献の読み、解釈方法の考察を通して「社会的なもの」として宗教のありようを考察する。

鶴留研究員は、『歎異抄』の解読を通じて宗教的理念を考察する。『歎異抄』に示される宗教的理念は、個人的なものであると同時に、言語化され、共同体における共通の理念として示されるものである。その意味で、宗教的「個」の理念は普遍へと、そして社会へと開かれている。これを学問的に確かめることによって、浄土真宗という一つの宗教とその理念が社会的なものとしての宗教という側面を有していることを明らかにする。

高橋研究員は、外国につながるのある人々への支援を中心とした社会課題に対して、宗教が果たす役割について明らかにする。移民・難民支援には多くの組織や個人ボランティアがかかわる中で、宗教関係者による支援にはどのような役割や意義が見られるのかを考察する。

藤井研究員は、近代社会における民衆宗教の展開を宗教集団に注目しながら明らかにする。教団、寺院・教会、サークルといった大小さまざまな集団単位が、民衆の生活課題に対してどのような機能を果たし、それが宗教の展開といかなる関係にあるのかを考察する。

後藤研究員は、老年期における宗教との関わりについて、沖縄や北部九州をフィールドに人びとの実践や語りを地域的・文化的コンテクストのなかから明らかにし、「社会的なもの」としての宗教と人びとの生き方の関わりを考察する。

デジタル・アーカイブ資料室

大谷大学所蔵貴重資料の
デジタル・アーカイブの構築

室長・教授 箕浦 暁雄
(仏教学)

本資料室の目的は、大谷大学図書館所蔵古典籍等の貴重な学術資産のデジタル化を行うことによって、資料の保存と公開、そして学術研究への利便性を図ることである。

2024年度においては、大谷大学図書館所蔵古典籍に関して約1,150冊の古典籍のデータベース構築を目標とする。従来、これらの古典籍のカタログは紙媒体のもののみが存在していたが、多くの研究者たちにこれらの古典籍の存在を伝え、研究に役立つようデータベースを構築している。本作業は2015年より継続中であり、現時点(2024年11月)では20,083件の古典籍のデータベースが公開済みである。

上記の目的および目標に基づく研究活動を概括すると、下記のとおりとなる。

- ① 大谷大学図書館古典籍のデータベース構築
- ② デジタル化された資料の保存と整理
- ③ その他の大学所蔵各種データのデジタル化と整理・保存、及び公開に向けての検討
- ④ 本学が取り組むべき各種データのデジタル化と整理・保存、及び公開に向けての検討

2024年度においては、上記のとおり研究活動を推進する。

2024（令和6）年度「一般研究」等組織一覧

【共同研究】

研究名等	研究課題及び研究組織	
一般研究（江森英世班） 【2020～2024年度「科研費」採択】 研究代表者 江森英世	研究課題	健聴児ならびに聴覚障害児の数学的コミュニケーションの認知 —非認知能力の測定
	研究員	江森英世（教授・数学教育学）
	協同研究員	竹村景生（天理大学教授）
一般研究（佐藤愛弓班） 【2022～2026年度「科研費」採択】 研究代表者 佐藤愛弓	研究課題	勸修寺資料からみた文庫の形成・維持に関する総合的研究 —新たな寺院文化論として—
	研究員	佐藤愛弓（教授・国文学）
	協同研究員	上島享（京都大学大学院教授） 藤原重雄（東京大学史料編纂所教授） 三好俊徳（佛教大学准教授）
一般研究（福島栄寿班） 【2022～2024年度「科研費」採択】 研究代表者 福島栄寿	研究課題	九州沖縄仏教史・真宗史に関する基礎的研究 —新出資料・布教ネットワーク・潜伏宗教—
	研究員	福島栄寿（教授・近代日本仏教史・近代日本思想史）
	協同研究員	松金直美（講師・真宗史） 知名定寛（神戸女子大学名誉教授） 川邊雄大（日本文化大学教授） 長谷暢（真宗大谷派沖縄別院輪番・法政大学沖縄文化研究所国内研究員）
一般研究（古谷伸子班） 【2023～2025年度「科研費」採択】 研究代表者 古谷伸子	研究課題	コミュニティ運動としての複合農業 —持続可能な農業の追求
	研究員	古谷伸子（講師・文化人類学／専門社会調査士）
	協同研究員	田邊繁治（国立民族学博物館名誉教授）
一般研究（武田和哉班） 【予備研究】 研究代表者 武田和哉	研究課題	ユーラシア東方史における文献史学・考古学の学融合的研究にむけた基礎的探究
	研究員	武田和哉（教授・社会史／考古学／人文情報学）
	協同研究員	古松崇志（京都大学教授・本学非常勤講師） 城倉正祥（早稲田大学文学学術院教授） 藤原崇人（龍谷大学准教授） 水野さや（金沢大学教授） 森部豊（関西大学教授） 赤木崇敏（東京女子大学教授） 毛利英介（昭和女子大学准教授） 齊藤茂雄（帝京大学専任講師） 小國結菜（京都市役所職員） 高橋亘（早稲田大学文学学術院助手）
一般研究（松川節班） 【予備研究】 研究代表者 松川節	研究課題	仏教を基軸としたチンギス・ハーン世界帝国の研究
	研究員	松川節（教授・人文情報学・東洋史学）
		三宅伸一郎（教授・チベット学）

一般研究（宮崎健司班） 【予備研究】 研究代表者 宮崎 健司	研究課題 研究員	奈良時代における仏典の受容とその深化に関する研究 宮崎 健 司（教授・日本古代史） 大 舩 啓（講師・日本古代史）
---	-------------	---

【共同研究】繰越による活動継続・補助事業期間延長

研究名等	研究課題及び研究組織	
一般研究（井上和久班） 【2020～2022年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長 研究代表者 井 上 和 久	研究課題 研究員 協同研究員	支援が必要な子どもと親のための光・音・匂い環境を用いた『親子の遊び空間』の開発 井 上 和 久（教授・特別支援教育） 大久保 圭 子（大和大学教授）
一般研究（木越康班） 【2021～2023年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長 研究代表者 木 越 康	研究課題 研究員 協同研究員	人口減少地域の宗教動態と仏教寺院の社会的役割に関する総合的研究 木 越 康（教授・真宗学・宗教学） 東 舘 紹 見（教授・日本仏教史（古代・中世）） 藤 枝 真（教授・宗教学・哲学） 徳 田 剛（准教授・地域社会学・社会学理論・宗教社会学） 藤 元 雅 文（准教授・真宗学） 野 村 実（講師・社会学（地域社会学・地域政策）） 齊 藤 仙 邦（東北福祉大学教授） 萩 野 寛 雄（東北福祉大学教授） 阿 部 友 香（佐久大学講師） 本 林 靖 久（本学非常勤講師・特別研究員） 磯 部 美 紀（東京分室PD研究員・社会学）

【個人研究】

研究名等	研究課題及び研究組織	
一般研究（井黒忍班） 【2020～2024年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	アフロ・ユーラシア乾燥・半乾燥地域の水利権に関する比較史研究 井 黒 忍（准教授・東洋史）
一般研究（阿部利洋班） 【2021～2024年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	集合的なニーズ・権利に関わるグローバルな正義の比較社会的な研究 阿 部 利 洋（教授・社会学）
一般研究（平田絵未班） 【2021～2024年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	日本人学習者のための韓国語発音教案開発 —語頭平音の音響音声学的考察を中心に— 平 田 絵 未（本学非常勤講師・特別研究員）
一般研究（寺川直樹班） 【2022～2024年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	フランス人格主義を基点とした「人格の完成」の再検討 —道徳教育との関連もふまえて— 寺 川 直 樹（講師・教育学）
一般研究（吹田隆徳班） 【2022～2026年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	薬師と阿弥陀：インドにおける浄土教の思想的変遷を追う比較研究 吹 田 隆 徳（任期制助教・大乘仏教（インド）・特別研究員）
一般研究（上野牧生班） 【2023～2027年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	世親『普賢行願論』のボタラ宮新出サンスクリット語写本研究 上 野 牧 生（准教授・仏教学）
一般研究（徳田剛班） 【2023～2025年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	ポストコロナ期の日本の地方部における外国人受け入れと社会的共生に関する総合的研究 徳 田 剛（准教授・地域社会学・社会学理論・宗教社会学）

一般研究（ターンブル班） 【2023～2024 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	外国語教育における「萌芽的バイリンガリズム」：研究・認識・更新 Blake A. Turnbull（講師・外国教育／応用言語学）
一般研究（白取耕一郎班） 【2023～2025 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	「参加の格子」モデルを用いた協働の長期的発展メカニズムの解明 白 取 耕一郎（講師・行政学・地方自治論）
一般研究（大関綾班） 【2023～2025 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	長編合巻『白縫譚』の長編構成に関する研究 大 関 綾（任期制助教・日本近世文学／和食文芸・特別研究員）
一般研究（岡部茜班） 【2024～2027 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	居住支援を必要とする若者の生活状況と支援方策 岡 部 茜（講師・社会学）
一般研究（野村実班） 【2024～2026 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	官民・市民の共創による地域モビリティの確保策に関する研究 野 村 実（講師・社会学）
一般研究（根無一行班） 【2024～2028 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	ポストコロナ的視点からのフランス現象学と宗教哲学の再考 根 無 一 行（講師・宗教哲学）
一般研究（温秋穎班） 【2024～2025 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	戦後日本の中国語受容の思想史研究 一倉石武四郎と藤堂明保を中心に 温 秋 穎（任期制助教・人文社会情報学／中国語中国文学・特別研究員）
一般研究（高橋泉班） 【2024～2025 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	異文化の領域における支援に関する研究 一インドシナ難民を中心に一 高 橋 泉（PD 研究員・教育学・特別研究員）
一般研究（藤井麻央班） 【2024～2025 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	教派神道体制下における教会の基礎的研究 藤 井 麻 央（PD 研究員・宗教学・特別研究員）

【個人研究】繰越による活動継続・補助事業期間延長

研究名等	研究課題及び研究組織	
一般研究（渡邊温子班） 【2017～2020 年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	『甚深伝』校訂と解析によるミラレーパの仏教思想の解明 渡 邊 温 子（特別研究員）
一般研究（高橋真班） 【2019～2023 年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	キンギョから見る知覚統合の進化的基盤 高 橋 真（准教授・比較認知科学）
一般研究（中野加奈子班） 【2019～2022 年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	社会改善活動へのソーシャルワーカーの参画可能性についての研究 中 野 加 奈 子（准教授・社会福祉学・社会福祉援助技術論・貧困問題・医療福祉生活研究）
一般研究（上原尉暢班） 【2019～2022 年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	『四六文章図』研究 一日本中世から近世における駢体の「読み書き」をめぐる一 上 原 尉 暢（本学非常勤講師・特別研究員）
一般研究（内田祐貴班） 【2020～2023 年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	プログラミング教育で小学校理科の理解を深められるか？ 内 田 祐 貴（准教授・教育学）
一般研究（大原ゆい班） 【2020～2022 年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	新たなソーシャルサポートとしての〈よりそう支援〉のモデル化に関する研究 大 原 ゆ い（准教授・社会学）

一般研究（狭間芳樹班） 【2020～2022年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	維新时期における東本願寺の破邪論とキリシタン —樋口龍温の未公開史料の分析と公開— 狭間 芳 樹（本学非常勤講師・特別研究員）
一般研究（本林靖久班） 【2020～2022年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	真宗地域における葬墓制と他界観に関する民俗学的研究 本 林 靖 久（本学非常勤講師・特別研究員）
一般研究（西村雄郎班） 【2020～2022年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	地方社会の解体的危機に抗する〈地域生活文化圏〉の展開と課題 西 村 雄 郎（特別研究員）
一般研究（中西麻一子班） 【2020～2023年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	南インドの仏教受容に関する図像学的研究：カナガナハハリ大塔 を手掛かりに 中 西 麻一子（本学非常勤講師・特別研究員）
一般研究（喜多恵美子班） 【2021～2023年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	植民地前後における日朝間美術交流について 喜 多 恵美子（教授・韓国朝鮮美術）
一般研究（川端泰幸班） 【2021～2023年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	南丹地域の歴史史料を活用した地域文化の発信と継承に関する研究 川 端 泰 幸（准教授・日本中世史）
一般研究（高橋学而班） 【2021～2023年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	9～13世紀の北アジア諸民族国家における多民族共生社会成立 の歴史考古学的総合研究 高 橋 学 而（特別研究員）
一般研究（濱野亮介班） 【2021～2023年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	中国近世における儒・仏・道三教の死者儀礼と明朝宗教政策との 関連について 濱 野 亮 介（特別研究員）
一般研究（古川拓磨班） 【2022～2023年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	日系オーストラリア文学の可能性を考察する —第二次世界大戦時強制収容体験を中心に— 古 川 拓 磨（任期制助教・日系英語文学・特別研究員）
一般研究（磯部美紀班） 【2022～2023年度「科研費」採択】 ※補助事業期間延長	研究課題 研究代表者	個人化社会の葬儀における僧侶介在に関する宗教社会学的研究 —法話に注目して— 磯 部 美 紀（PD研究員・社会学・特別研究員）

【PD 個人研究／就任年月、50音順】

研究名等	研究課題及び研究組織	
個人研究（磯部美紀班）	研究課題 研究代表者	現代日本における葬送儀礼と僧侶に関する研究 —首都圏の事例を中心に— 磯 部 美 紀（PD研究員・社会学）
個人研究（澤崎瑞央班）	研究課題 研究代表者	中国仏教における不退転の概念内容の解明 澤 崎 瑞 央（PD研究員・仏教学）
個人研究（鶴留正智班）	研究課題 研究代表者	浄土真宗の古典に示される理念の研究 鶴 留 正 智（PD研究員・真宗学）
個人研究（高橋泉班）	研究課題 研究代表者	外国人支援における宗教に関する研究 高 橋 泉（PD研究員・教育学）
個人研究（藤井麻央班）	研究課題 研究代表者	近代民衆宗教の集団と実践に関する研究 藤 井 麻 央（PD研究員・宗教学）

2024(令和6)年度「一般研究」(新規採択課題)研究目的紹介

個人研究

薬師と阿弥陀：インドにおける浄土教の思想的変遷を追う比較研究 (科研費 22K12975)

研究代表者・任期制助教 吹田 隆徳
(大乘仏教)

インドの浄土教が大乘仏教の興起と発展に与えた影響を調査すべく、比較的新しい薬師仏から阿弥陀仏を経て、最も古い可能性のある阿闍仏までを比較研究するという大枠の研究計画を立てている。

その計画の下に、本研究では、まず薬師仏と阿弥陀仏を比較対象として取り上げることにした。この二仏の比較を先行させることで、浄土教がインドでどのように発展したかを明らかにし、最終的に阿闍仏へと邁るための研究基盤を構築することを目的としている。

現在、主に阿弥陀仏が登場する文献の分析を進めているが、中でも『般舟三昧経』は最古の文献として注目に値する。この経典は支婁迦讖が179年に訳出したとされるが、現行本(T418)は複数の編纂過程を経たと考えられている。

支婁迦讖訳には、経典の冒頭に必須とされる「如是我聞」に相当する文が欠如しているほか、偈頌が韻文として訳されていないという特徴が見られる。一方で、異本には修正版が収録されており、現行本は偈頌が部分的に修正版と入れ替えられている。思想研究に入る前の基礎作業として、編纂過程を解明することはもちろん、この修正版の訳者を特定することが、長年にわたり学界の課題となっている。

昨年度に行った分析の結果、その訳者が竺法護である可能性が高まっている。というのも、修正された文からは、竺法護が用いる訳語と一致する例が多く確認されており、その中には当人しか用いない訳語も含まれることが判明したからである。

今後は『般舟三昧経』の編纂過程を解明する調査に重点を置く予定である。散文・韻文に見られる訳語の分析を行い、支婁迦讖・竺法護(仮)の語彙集を作成し、現代語訳を公開する。また、それと並行して、阿弥陀仏が登場する他の文献、例えば『悲華経』などの分析も継続して行うつもりである。

個人研究

プログラミング教育で小学校理科の理解を深められるか？ (科研費 20K02750)

研究代表者・准教授 内田 祐貴
(科学教育、物理学)

2020年度から実施されている小学校学習指導要領に、いわゆるプログラミング教育が初めて導入された。プログラミング教育と理科の相性を考えた時、小学校理科の授業でプログラミング教育を扱うことは妥当だと考えられる。しかし、学習指導要領の記載が「電気の利用」のみであることから、教科書もそれに準じた形となっており、この單元以外での理科におけるプログラミング教育の研究は手つかずの状態であった。

本研究の目的は、プログラミング教育が、小学校理科の理解を深めることにつながるかを、「小学校理科の観察実験用プログラミング教材」の研究開発と、研究開発した教材の検証の2点から明らかにすることである。

本研究では、理科の授業で実施されている実験観察のうち、プログラミングでの制御に適し、複数回行われているものを対象にプログラミング教材の研究開発を行った。具体的には、温度測定教材、天気天体撮影教材、電気回路制御教材の3つである。教材はシングルボードコンピュータを基盤に、制御にはビジュアルプログラミング言語を用いた。そして、これらの教材が実際に小学校理科の授業で利用できるかを検証した。

これにより、例えば、温度測定教材は、4年生「天気の様子」の単元で行う、1日の気温の変化の測定に利用できる。この教材で、「1時間ごとに気温を測定し、記録(表示)」するようプログラミングをし、実際の測定結果は、1日の気温の変化を十分に捉えられ、授業で利用できることを示せた。他の教材も同様に、各単元で行われる実験観察授業で使えることを示した。

小学校でのプログラミング教育とその研究は、始まったばかりであり、現場の状況などを踏まえながら、これまでの研究実証の成果を整理分析しつつ、理科のためのプログラミング教育を充実させる研究を進めていきたい。

個人研究

居住支援を必要とする若者の
生活状況と支援方策

研究代表者・講師 岡部 茜
(社会福祉学／若者支援)

本研究は、居住支援を必要とする若者の生活状況と、そうした若者への有効な支援方策を明らかにすることを目的としている。従来、日本の若者支援研究では、就労と居場所の支援について中心的に研究される一方で、居住支援の視点は欠落し、若者の葛藤の一要因である家族扶養規範を放置することにつながってきた。それにより、若者支援は、家族がサポートできる若者により利用しやすいものとなり、家族の支えがない若者は支援から排除されがちであった。

しかし、2000年代後半からは若者の居住問題が支援現場から報告され始めた。また、COVID-19の流行とそのもとでの日本政府の対応は、雇用機会を縮小し、また在宅仕事の推奨による家族内の葛藤の強まりを引き起こした。それにより、家賃が払えず家を失う若者や、家族との葛藤により家出する若者が増加・可視化されるようになった。また、そうした若者へ対応する活動として、民間支援団体がシェアハウスやシェルターを用意し、若者へ居住支援をおこなう団体が増加した。居住問題に直面する若者の増加・可視化や、また「トー横」「グリ下」と呼ばれるような、繁華街の一部でたむろする若者への社会的な注目もあり、若者への居住支援は注目されはじめたところであるが、課題が可視化したのが近年であるため、研究は進んでいない。

そのため本研究では若者と居住支援をおこなう支援者双方へのインタビュー調査を通して、若者の住生活の点から、若者が直面する問題と支援方策を検討する。また、若者の住生活を軸に、若者の住生活上の困難と若者への居住支援の双方を明らかにすることを通して、従来の若者支援研究では見落とされてきた家族扶養を強いる制度の問題を可視化させ、併せて就労偏重の弊害をより明確に示し、有効な若者支援への示唆を提供することを目指す。

個人研究

ポストコロナ的視点からの
フランス現象学と宗教哲学の再考

研究代表者・講師 根無 一行
(宗教哲学)

20世紀後半に登場した「宗教概念批判」の功績は、「宗教」概念のもつ西洋近代知の覇権的性格を暴き、「宗教＝西洋／二流の宗教＝非西洋」という階層秩序的な二分法を解体する点にある。ただし、「宗教」概念を捨て去ればよいというわけではない。もしそうならこれまで「宗教」の名の下で意味づけてきた事柄や今日なお種々の領域で作動している「宗教」的な語りの数々までもが無効化されてしまう。重要なのは、二分法的思考それ自体を警戒しつつ、ポストコロナ的視角から「宗教」概念を再定義していくことである。

以上の背景と問いの下、本研究の目的は、「宗教」の再定義を求める経験と表現の層を、「事象そのものへ」を標榜する現象学、ただし「神学的」なフランス現象学第二世代ではなく、非宗教的な第一世代のサルトルのテキストから掘り起こしていくことである。

第二世代は「宗教」由来の語彙と連関づけながら「志向性」の「手前」や「彼方」へと現象学を変容させていったが、「宗教概念批判」から見返すならば、第二世代に見られるその「志向的知／その手前・彼方」という新たな二分法には批判されるべき「宗教」概念の覇権の再生産につながりかねない危険が潜んでいる。むしろ第二世代によって批判された第一世代の現象学者たちの方が、哲学知の閉域に収まらず、マルクス主義やアルジェリア戦争へのコミットメントなどを通して、一見非宗教的なその志向的知の中に、多様な越境性と多層性を組み入れていたのではないか。

そこで本研究は、「原-総合」を明らかにしようとするデリダの脱構築をサルトルに投げ返し、その「弁証法」的論理を読み直すことにしたい。そして、同時代の第三世界の状況との緊張関係の中でサルトルを読むための補助線になるのが、パレスチナや黒人の解放運動に独特な仕方に関わったジャン・ジュネである。

以上の方法論によって、サルトルの仕事は容易にジャンルを確定できない言説群として、従来の宗教概念の下では「まがい物」とみなされる言葉たちと共に現れてくるはずである。それは宗教哲学という学問のための極めて豊かな創造的な資源になるだろう。

個人研究

官民・市民の共創による地域
モビリティの確保策に関する研究

研究代表者・講師 野村 実
(地域交通政策、社会学)

本研究は、官民・市民の共創による地域モビリティの確保策を主題とし、高齢者をはじめとする住民の移動手段の確保に向けた実践的・政策的課題を、継続的なフィールドワークに基づいて分析し、地域モビリティの確保に向けた具体的な方策を明らかにすることを目的としている。地域モビリティをめぐる課題として、高齢者の免許返納後の代替手段の確保が差し迫った課題となっている一方で、バスやタクシーなどの既存の地域公共交通の維持や存続が危機的状況に陥っている。また政策的にも「共創型交通への転換」がミッションとされているが、実際には事例の蓄積途上にある。そこで本研究では、複数地域でのケーススタディを通じて、官民・市民の共創の具体像を提示しながら理論構築を試み、地域モビリティの確保策の導出をふまえて、現場への実践的・政策的な提言を行うことを目指す。

具体的に本研究では、官民・市民の共創に向けた理論構築と、先進事例における実践と政策展開から地域モビリティ確保の方策を導出する。これを自治体や事業者、NPOなどの地域のアクターに提示していくことを目的としている。特に、住民参加型のライドシェアの取り組みの蓄積がある、あるいは新たに取り組みを開始している京都府京丹後市や舞鶴市、兵庫県養父市などの近畿北部地域を対象地域として設定しつつ、欧州等で進められている官民・市民連携の視座から、市民・住民が多様な形で参画する取り組みの類型化を試みる。

また、地域社会やコミュニティに関わる理論的整理から「公・共・私」の視点を、従前の交通研究に援用しようとする点も本研究の特徴である。具体的には、公（公共交通）と私（自家用車）の間にある「共」、すなわちコミュニティやコモンズと呼ばれる領域に着目する。とりわけ、自家用車での移動や家族の送迎によって「私」的に閉じられている傾向にある現在の地域モビリティが、「共」を通じていかにして「公」的に開かれうるのか、住民やNPO、自治体、交通事業者等の多様なアクターの動態を分析する。

個人研究

戦後日本の中国語受容の思想史研究
—倉石武四郎と藤堂明保を中心に

研究代表者・任期制助教 温 秋穎
(人文社会情報学/中国語中国文学)

本研究は、戦後日本の中国認識の重要な側面である、外国語としての中国語をめぐる研究・教育・学習の思想的な問題を深掘りすることを最大の課題として、いままで体系的に検討されることがなかった言語学者・教育者である倉石武四郎（1897-1975）と藤堂明保（1915-1985）の言語認識と教育思想を検討し、彼らの言語認識、教育思想と戦後の日本社会との相互関係を明らかにしようとするものである。

吉川幸次郎が「支那語の不幸」（1940）として指摘したように、明治以降から敗戦まで、日本社会では中国語が英・独・仏語のような「教養」の外国語として認められることはほとんどなかった。中国語受容の学問的、社会的な環境の改善は、第二次大戦後の困難な状況のなかで成し遂げられ、そこで言語学者・教育者である倉石と藤堂の貢献が大きかった。

冷戦下及び日中国交正常化前の危機の時代において、中国語受容を通して文化交流のルートを保ったこの歴史は、世界の分断が進む今日あらためて振り返る社会的な意義がある。いままでの中国語教育史の分野では、教育の思想的な意義を検討する研究は殆ど見られない。本研究は、倉石と藤堂が牽引した戦後日本における中国語の文化の受容過程にあった思想的な問題点を、戦後日本の思想史のなかに位置づけ、戦後日本の中国研究・中国文学研究の学術史において再評価することを目的とする。

倉石と藤堂は戦後日本の中国語研究・教育で連続する二つの世代をそれぞれ代表し、しかも言語認識、教育経験で共通点が多かった。二人の繋がりに着目する視点は、戦後日本の中国語研究・教育の全体像を俯瞰するために有効であると考えられる。

本研究は文献研究の手法を取り、二人の言語認識と教育思想をめぐって主として以下の4つの側面から考察する。①語学教師の言語認識と言語教育の関係性、②教育の民主化、東アジアの情報社会のなかの漢字・漢文の問題、③倉石と藤堂による語学教育の方法・理念、④文化大革命と大学紛争のなかで中国語学習が置かれた状況と中国認識の変遷。

個人研究

異文化の領域における支援に関する研究

—インドシナ難民を中心に—

研究代表者・東京分室 PD 研究員 高橋 泉
(教育学)

1970年代に生じたインドシナ難民問題に際し、国家政策として1980年から1998年まで関東地区の難民支援拠点として神奈川県大和市に置かれた「大和定住促進センター」がある。受け入れた難民は総計2,600名を超え、同センターの設置と運営は地域住民を巻き込んだ日本初の国家プロジェクトであった。同センターの運営については、ボランティア団体や地域住民などが多方面から生活支援を行ったことが行政刊物や諸種の文献資料から明らかにされてきた。

一方、被支援者側であったインドシナ難民の記憶する同センターの難民支援についての調査研究は、かれらの宗教的側面も含めて十分ではない。従って本研究の問いは、同センターの難民支援を事例に外国人支援を再検討する上で、被支援者である難民は、当時の支援や指導をどう受け止めていたのか、という点である。

そこで本研究では、地域に定住したインドシナ難民への調査を実施し、当時の難民支援の様相を被支援者の立場から明らかにすることで、異文化の領域における支援のあり方の再検討を行うことを目的とする。具体的には、インドシナ難民定住地域の拠点となっている難民の墓や文化センター等へ訪問し、聞き取り調査を実施する。なお難民の墓は、定住促進センター周辺地域にある寺院の土地提供を受けて1987年に設立されたが、その後の管理はインドシナ難民に任せられ、現在も定期的に難民の遺族が集まって掃除や供養活動などを行っている。

本研究を行うことで、現代の地域社会においてどのように移民・難民を受け入れていくべきかという問題について、被支援者側の記憶する実際の経験を基にした新たな事実を解明し、いわゆるニューカマーに光が当てられがちな現代の外国人問題において、定住経過年数の高いインドシナ難民が今なお抱えている問題の発掘にも繋げていきたい。

個人研究

教派神道体制下における教会の基礎的研究

研究代表者・東京分室 PD 研究員 藤井 麻央
(宗教学)

本研究の目的は、近代日本における民衆宗教の活動の解明に向けて、教派神道の教会制度と、その制度下で各地につくられた教会の変動を解明し、教会の特質を提示することである。

近世後期から近代において民衆の間に起こった創唱の宗教である民衆宗教の多くは、明治政府によりつくられた教派神道体制の下で教会を組織して活動を行った。このため、民衆宗教の活動の実態を理解するには、教会が重要な要素となる。しかし、教会、講社、教務所、教院、教会所、説教所等の様々な名称が刻々と変化した様相や各々の意味内容が吟味されないまま、“信者が集い宗教活動を行う施設”といった素朴な認識に現状は留まっている。それにより、多様な活動形態が政策的に教会として一括されたことによる民衆宗教の変質と、かかる近代宗教史上の動態を捕捉できていない問題がある。

そこで、制度研究、定量研究、事例研究を組み合わせることで教会の変動を明らかにしながら、その特質に迫る。制度研究では、教会と社寺との比較を含めた文献調査・分析により、教会に関する規定・法令・条例等の変遷とその要因を明らかにする。定量研究では、公的統計資料を用いて、教会と社寺との比較も行いながら、各派の教会の増減と全国分布等の量的動向を明らかにする。事例研究では、天理教を中心に各派の教会の状況を調査・収集し、制度研究と定量研究で明らかとなる政策と量的な動向を重ねて、共通点や相違点を明らかにする。

教会がいかなる規制や保護を受けながら、質的・量的に変化していたのかを解明することは、民衆宗教の活動を近代社会の中で捉えながら検証するために必要不可欠な基礎的研究である。よって本研究の成果は、民衆宗教研究において広く参照され得るものであると同時に、量的研究に乏しい近代宗教史全体に対しても方法論的に一石を投じるものである。

共同研究

ユーラシア東方史における文献史学・考古学の学融合的研究にむけた基礎的探究

研究代表者・教授 武田 和哉
(歴史社会学・考古学)

本研究はユーラシア東方地域をフィールドとして、その歴史研究に関して文献史学と考古学の協業による学融合に向けた研究を志向し、今年度の予備研究ではそのベースとなるプラットフォームの構築に主眼を置いた研究活動を目的としている。

具体的には情報処理技術の発展に伴い、近年注目されつつある GIS (= 地理空間情報システム: Geographic Information System、以下「GIS」と略称。)を用いての可視化型の情報共有基盤の構想検討、およびその先行モデルの開発を試行すること計画している。各種の学術情報を分野・種類ごとに各レイヤー上に集約し、地理的情報と併せて可視化できる機能となるような内容を目指している。

本研究の遂行に際しては、実際に GIS ソフトおよび関連する補助ソフトなども導入して作業を開始している。また実際に GIS システムを構築した経験があり、オペレーション操作等に通暁している研究者を招聘して、知識・技術等の移転を図りつつ、さらには京都府内に所在する都城・寺院跡などの史跡地を訪問して、現地における GPS データの観測と取得の実務手順の確認、観測機器の操作や性能確認なども並行して実施している。

このほか、関連する文献史学・考古学分野の研究会を定期的に開催して、参加する研究者からの意見聴取を行っており、そうした指摘を可能な限り GIS の設計や各種設定などに反映させたい。

最終的には、今後の研究継続を見据えつつ、GIS 構築における一定の見通しを立てるとともに、ノウハウ獲得や問題点の洗い出しなどを行い、それらの要点の整理を予定している。

共同研究

仏教を基軸としたチンギス・ハーン世界帝国の研究

研究代表者・教授 松川 節
(人文情報学)

13 世紀モンゴル帝国時代の外来宗教（仏教、キリスト教、道教、イスラム教）の中で、モンゴル政権の統治理念に最も大きな影響を与えた仏教を研究対象とし、①チンギス・ハーンは仏教といかなる接点を持っていたか。②13 世紀のモンゴル政権はなぜ仏教を統治理念に援用したのか。③モンゴル帝国時代の仏教の理念は、近現代のモンゴル仏教にも継承されたのかという問いに答えるために、モンゴル帝国時代の仏教の諸相を共時的に解明し、モンゴル史上の仏教的統治理念の変遷を通時的に解明することを目的とする。本予備研究ではこのうち①に絞って研究を行い、研究実績を積むことによって本研究へと効果的に繋げることを目指す。具体的には次の研究を計画する。

- 1) 未だ発掘の手が及んでいない、チンギス・ハーンの葬送儀礼が行われたとされる「サアリ・ヘル（薩里川）のガロート（哈老徒）の行宮」（現モンゴル国トウブ県バヤン郡ブールジュート遺跡）において試掘調査を行い、年代決定のためのサンプルを採集する。
- 2) モンゴル語とチベット語のチンギス・ハーン崇拝文書における仏教的要素を抽出し、シャマニズムの要素との混淆状態を研究する。

研究方法としては、1) の調査はモンゴル科学アカデミー考古研究所の B. ツォクトバートル研究員と共同し、遺跡現地にて 3 日間の発掘を行う。その時期は、2024 年 8 月に行う。2) についてはモンゴル語文書を松川、チベット語文書を三宅が担当し、相互の比較研究を両名が共同して行う。

これらの予備研究の結果、今まで曖昧模糊としていたチンギス・ハーンと仏教の関係を明らかにする具体的証拠が見つかる可能性が高く、総合的な本研究を効果的に進めることを見込むことができる。

共同研究

奈良時代における仏典の受容とその
深化に関する研究

研究代表者・教授 宮崎 健司
（日本古代宗教史）

勘する古写経を重点的に実地調査していきたい。

奈良時代の宮廷写経所では多くの仏典が書写され、現存する古写経も少なくない。しかし当該期の仏典受容、いわば仏教理解の具体相は明らかとはいえない。そこで奈良時代の仏典受容の解明を通して、当該期の仏教理解の具体相を明らかにしようとするのが本研究の課題であり、目的である。

本研究では、仏典受容の具体的状況を明らかにするために天平勝宝年間（749～57）に実施された「勘経」に着目して分析をすすめることにしたい。勘経は、二種類が確認でき、一つは光明子発願一切経（五月一日経）全体を唐からの舶載経（図書寮経）を証本として校訂したもので、もう一つは五月一日経『大宝積経』のみを対象に同様に校訂したものである。しかし、後者では『大宝積経』に関連する仏典も参照していた。

このように勘経のあり様は明らかにされているが、勘経の中味は明確ではない。その分析のためには勘経史料の再分析と、伝存する五月一日経の実地調査により勘経の痕跡を検出し、両者を比較検討することで明らかにできると考える。具体的には勘経追跡のある古写経と、現存する『大宝積経』の悉皆調査となる。すでに、その前提的作業をおこなっているが、予備研究では、国内の実地調査を積極的にすすめていくことにしたい。それによって科研費の次期申請時の目的や方法がより具体的に明確となり、研究開始と同時に本格的な研究に取り組めるものと考ええる。

すでに勘経追跡のある古写経の部分的な調査によって、勘経の痕跡としての位置付けがある程度見通せるようになってきた。例えば、紙片を貼付して墨書することで校勘するというものである。そして、それは大安寺に関わる勘経追跡をもつ『大方等大集月藏経』巻第九（聖語藏）・巻第十（大東急記念文庫）および『大方広十輪経』巻第一（聖語藏）・巻第三（大東急記念文庫）のほか、元興寺に関わる勘経追跡をもつ『註楞伽経』巻第七（大東急記念文庫）にも見出せ、紙片貼付に墨書をする校勘の共通性が看取できた。これは一貫した勘経方式に基づく校勘、つまり天平勝宝年間における勘経の痕跡と考える有効な証左であると考ええる。

ついでには、予備研究では紙片貼付に墨書によって校

2024(令和6)年度東京分室 PD 研究員個人研究 研究目的紹介

個人研究

外国人支援における宗教に関する研究

研究代表者・東京分室 PD 研究員 高橋 泉
(教育学)

第二次世界大戦後、米軍の占領下におかれた横浜を中心とした神奈川県では、米軍人と日本人女性とのあいだに生まれた子どもが多数存在した。ただ様々な事情から親が育てることができず、孤児となっていた外国につながる子ども（以下「国際児」と略記）を保護するために設立されたのが児童養護施設「聖母愛児園」である。このうち学齢期に達した男児の国際児は、神奈川県高座郡大和町（現在の神奈川県大和市）に設立された分園「ファチマの聖母少年の町（Boys Town）」（以下「少年の町」と略記）で養護された。

こうした国際児の養護活動については、過去の人種差別的な事実を中心的話題としながら多方面から知見が蓄積されてきた。一方で、大和町で運営された少年の町における支援活動に着目してその実態について解明する、ということはこれまであまり行われてこなかった。言い換えれば、少年の町におけるカトリック関係者による国際児への日常生活支援や教育的活動は、当時の日本社会においてどのような意義を有し、国際児たちの育成においてどのような役割を果たしていたのかという点に着目し分析した研究は、相対的に多くない。また戦後 80 年近くが経過する中、国際児たちは高齢期を迎え、病気を抱えるなど高齢期独自の問題も存在している。

そこで本研究では、一つ目に、少年の町関係者が残した戦後の国際児養護活動に関する史料に着目しその分析を行うことで、少年の町における支援の特質とその教育的役割を明らかにする。二つ目に、少年の町関係者への調査を行い、施設退所後の日本社会における国際児の様相とカトリック関係者によるアフターケア活動の実態や、高齢期となった国際児特有の問題とその対応等について実証的に明らかにし、戦後から現代まで続く、国際児問題における宗教関係者による支援活動の社会的意義を解明する。

個人研究

近代民衆宗教の集団と実践に関する研究

研究代表者・東京分室 PD 研究員 藤井 麻央
(宗教学)

本研究の目的は、近代日本における民衆宗教の展開の解明に向けて、教団、寺院・教会、サークルといった大小さまざまな単位の宗教集団に注目しながら、民衆宗教の実践の一端を明らかにすることである。

黒住教、天理教、金光教に代表される民衆宗教に対する研究は、教団を特定し、その開教期の教祖、教団、教義を扱う傾向があった。近年になり、教祖以後にあたる明治中期から昭和期の解明も進み始める中、本研究では教団の裾野に広がる多様な活動体による実践をも捉えながら、民衆宗教の展開を史資料から明らかにする。

軸に据えるのは、高橋正雄とその周辺の活動である。高橋は金光教の教師であるが、西田天香をはじめとする一燈園の関係者、愛媛県の真宗僧侶だった本城徹心、臨濟宗西光寺住職の照峰馨山、キリスト者であり詩歌人の宮崎安右衛門ら、多様な背景を持つ者たちと付き合いを持っていた。そして、時に彼らと雑誌刊行や集会等のサークル的活動を行っていた。このような活字メディアも活用して教団の外に広がった活動は、近代仏教研究を中心に近年注目されるようになりつつあるが、未だに教団や宗派ごとの研究が多い。本研究が扱うのは宗教組織の枠組みを越えた実践を把握し得る事例であり、一次資料を収集しながら、彼らの世界観や共感の基盤を丁寧に汲み取り、分析を進める。

高橋正雄は、昭和一〇年前後から戦後に至る金光教の改革を進めた教団史における重要人物として知られるが、これまで明らかにされていない高橋の超宗派的活動について詳らかにすることで、教団人ではない生活者としての高橋を描く。さらに、宗教の違いを超えた高橋の実践が、高橋という教団改革のキーマンを通じて民衆宗教を代表する金光教にいかにか影響したか否かを検討することで、教団の内と外との循環の過程から、民衆宗教の近代経験を考察することにつなげる。

公開研究会報告（2024.4.1～2024.9.30）

「仏典からいかに意味を抽出するか ——仏典研究再考——」

下田正弘（武蔵野大学教授／東京大学名誉教授）

大谷大学真宗総合研究所東京分室 PD 研究員 澤崎 瑞央

2024年6月24日（月）に、大谷大学真宗総合研究所東京分室が主催となり、武蔵野大学教授／東京大学名誉教授である下田正弘氏を講師として、またコメンテーターとして親鸞仏教センター所長である本多弘之氏を招聘し、「仏典からいかに意味を抽出するか——仏典研究再考——」という題目で公開研究会（オンライン）を開催した。下田正弘氏は、2020年に『仏教とエクリチュール——大乘経典の起源と形成——』（東京大学出版会）を上梓し、大乘仏教の起源に関する新説を提示している。今回の研究会では、その新説を踏まえて、大乘仏教経典から意味を抽出することを改めて問いとすることにより、仏教研究のありようを再考することを目的とした。

公開研究会は、東京分室と同じ建物にある親鸞仏教センターにご協力いただき、親鸞仏教センター3階を講演会場とした。会場には、後藤晴子東京分室長をはじめ東京分室のPD研究員とともに、親鸞仏教センターの加来雄之主任研究員（当時）を中心に研究員が集まった。また、さまざまな協力のもと、オンラインでは100名弱の参加者が集まり、日本において伝統的な思想背景となってきた大乘仏教の起源や、仏教学の研究方法を再考することへの関心の高さが窺われた。

下田正弘氏の講演では、まず仏典研究それ自体が倫理という問題に関わっていることを確認することからはじまった。ここで述べられる倫理とは単なる研究倫理ではなく、仏典の言説から「意味」がどのように獲得されるかという仏教学の問いそのものが、そもそもいかに意味が発生するのかという問いを内包しており、そのために他者との関わり、つまり倫理が問題にならざるを得ないというものである。このような視点から、意味は「どこに現象するのか」という問題を問い、さらにその問題を深めていくにあたり、意味は「どこから到来するのか」という問題にふれていく。

長い時間をかけて受け継がれてきた仏典は、地層が

形成されるように、ことばが積み重ねられてきたものであり（Y軸）、これを研究者は、現在という一点を基準とする水平方向に広がる世界的な思想状況をもって向き合っていく（X軸）。時代の重なり・展開に目を向ける歴史研究や文献研究（Y軸）と、仏典に関わる人々に焦点を当てる現代思想研究（X軸）は、それぞれの軸の上を自由に動くダイナミックなものである。このような動的な研究は静的な叙述形式に収めとられていくが、ここにおいて問題となるのが、どのような叙述形式を用いるかということである。下田正弘氏は、ヘイドン・ホワイトの研究を基に、どのような叙述形式におさめとられているかが、意味を抽出することにおいて重要な点になると述べる。

さらに、ウィルフレッド・キヤントウェル＝スミスの聖典研究において「超越」が問題提起されていることを踏まえて、下田正弘氏は、レヴィナスの「語る」と「語られること」に着目する。レヴィナスは、聖典の言説を理解しようとするその行為そのものが、自己同一性を形成する過程に重なってしまう危険を問題視している。既に形成された概念性や理念によって私たちが規定されることになり、意味が既存のものの中に幽閉されてしまうためである。そこで、下田正弘氏は、レヴィナスが指摘する「痕跡」のありようが「私と隣人の関係」に例えられていることを紹介し、そこにこれまで議論されてきた意味領域における「意味付与」とは異なる、「意味すること」を見出すことができると述べる。この点にスミスの述べるような超越との関係、聖典とのかかわりにおいて、意味がいかに到来しているかを考えることができるという。

講演の後には、本多弘之氏のコメントに続いて活発な質問が飛び交い、仏典から意味を抽出する際に起こる思考過程について有意義な議論ができた。本研究会では、下田正弘氏の仏教研究のありようを再考する試みを通じて、有益な視点を共有できたと思われる。

海外研究調査報告（2024.4.1～2024.9.30）

大谷大学真宗総合研究所と中国社会科学院古代史研究所との学術協定に基づく共同研究の実施 （在中華人民共和国・北京市）

東アジア・北アジア仏教研究 研究代表者・教授 松川 節
東アジア・北アジア仏教研究 研究員・准教授 井黒 忍

2024年6月7日（金）～11日（火）、大谷大学真宗総合研究所と中国社会科学院古代史研究所との学術協定に基づく共同研究を実施（在中華人民共和国・北京市）した。大谷大学側は指定研究：東アジア・北アジア仏教研究班研究代表者の松川節（社会学部教授）と井黒忍研究員（文学部准教授）計2名が参加した。

6月7日（金）、松川と井黒は13：20 関西空港発 CA928 便にて16：15 定刻到北京首都国際空港着。古代史研究所の宋学立研究員、外事課の田超氏の出迎えを受け、車で宿泊ホテル（北京格蘭雲天大酒店）へ移動、18：00 チェックイン。18：30、ホテル2階のレストランにて卜憲群所長主宰の宴席に招待され、旧交を温めた。劉中玉（古代史研究所副研究員・文化史研究室主任・中国国学研究与交流中心副主任）、田超、王博（古代史研究所助理研究員、日本語通訳）その他の研究者も列席した。

6月8日（土）、9日（日）は中国側研究者との共同研究・情報交換を行なった。松川はチンゲル（青格力）古代史研究所元研究員と面会し、13・14世紀モンゴル語石刻資料についての情報交換、中国およびブリヤート共和国における梅檀釈迦牟尼仏の研究の現状について意見を交換した。井黒は精華大学人文学院歴史系の阿風教授と面会し、中国社会史および宗教史の研究状況について意見を交換した。

6月10日（月）09：30 古代史研究所を訪問し、座談会形式での共同研究を実施した。まず井黒が「遼金元代史研究動向」と題して、最近4年間の日本における研究動向を紹介し、続いて松川が「十五世紀蒙語資料研究的現状及展望」と題して、15世紀に成立したモンゴル語資料の研究状況と展望について報告した。劉中玉研究員が司会を勤め、鄒文玲副所長、オヨーンゴア（烏雲高娃）研究員、康鵬研究員、楊宝玉研究員、その他計16名が参加した。

12：00、近隣のレストランにて鄒文玲副所長主催の宴席に招かれた。13：00 ホテル帰着。17：00、松川は故宮博物院図書館の春花研究員の招待を受け、夕食を共にした。



写真1：左より劉中玉研究員、鄒文玲副所長、松川、井黒



写真2：6月10日開催の座談会のようす

6月11日（火）08：00 ホテルチェックアウト。古代史研究所の羅璋助理研究員の迎いで北京首都空港へ。11：45 発 KE2202 便にて帰国の途につき、ソウル乗り継ぎ KE2119 便にて18：15 関西空港に到着した。

本学術協定に基づく北京訪問は、新型コロナ禍終息後初めての実施となった。古代史研究所のト所長、鄔副所長をはじめとする関係者は、極めて友好的であり、相互の学術交流を推進する意欲を真摯に示された。さらに、学術協定の再締結に向けた前向きな意見交換が行われた。なお、中国査証（30日有効の交流・視察（Fビザ））は、先方から招聘状を受領後、大阪の中国ビザ申請センターにて取得した。

「仏教を基軸としたチンギス・ハーン世界帝国の研究」 2024年夏期モンゴル現地調査報告

一般研究（松川節班） 研究代表者・教授 松川 節

「チンギス・ハーンは仏教といかなる接点を持っていたか」という問題関心の下、2024年8月5日～8月15日にモンゴル国にて現地調査を実施した。

①チンギス・ハーンのオールド（移動宮殿）の巡検調査

13世紀のユーラシアにモンゴル世界帝国の基盤を築いたチンギス・ハーン（1162～1227）はモンゴル高原に「オールド」と称される移動する宮帳を設置し、后妃を伴ってその間を季節的にもしくは出征の際に移動していた。史料によるとチンギス・ハーンは「四大オールド」を設けており、このうち夏のオールド駐営先「サアリ・ヘール」は、晩年に西夏仏教と接していたチンギス・ハーンの葬送儀礼を行った地でもあるため、発掘によって何らかの仏教遺物が出土する可能性がある。今回はそれに先立ち、「四大オールド」のうち「ナイマンのオールド」候補地を巡検した。

巡検に際して、「チンギスハーンのオールド駐営地を結ぶモンゴル高原の交通路は、17世紀以降の清朝期の駅路跡にその痕跡を残しているのではないか」という作業仮説を設定し、筆者が2024年度より研究分担者を務める科研基盤B「清代モンゴル地図の総合的研究」（研究代表者：中村篤志・山形大学教授）と共同で調査を実施した。

8月5日 中村篤志・山形大学教授、S. モンフバートル・チンギスハーン遺産文化研究所研究員とともに専用車にてウランバートル出発。オボルハンガイ県からバヤンホンゴル県にかけての清朝時代の駅路に沿って645km走行し、バヤンホンゴル県バヤンホンゴル市内ホテル泊。

8月6日 バヤンホンゴル市南10キロに位置する清朝期の兵站遺跡「エフテルヒー・バルガス」調査。バヤンホンゴル市に戻り、ガロート郡、ザグ郡、ゴルワンボラグ郡、オトゴン郡経由でザブハン県ウリヤスタイ市へと進路をとる。ハンガイ山脈南麓を通る清朝時代の駅伝路である。オトゴン郡到着時点ですでに22時を過ぎていたが、ここからはオトゴンテンゲル山の西南山麓の険道を選び、25時ウリヤスタイ市着、市内のホテル泊。

8月7日 ザブハン県イデル郡の2つの仏教寺院址イラゴグサン・ホトクト寺院址とハンビーン・フレ

ー寺院址の調査。いずれもロシアのモンゴル学者ポズドニエフが1892年に現地調査をおこない、詳細な記録を残している寺院である。ザブハン県トソンツェンヘル郡に移動してホテル泊。

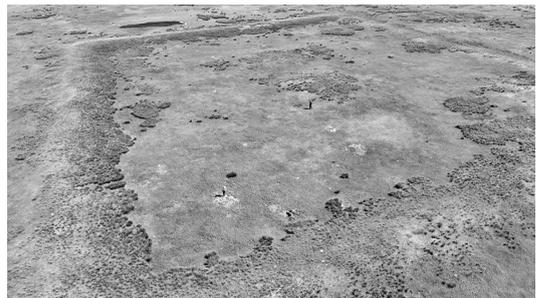
8月8日 ザブハン県イフオール郡のザガスタイ峠にてハンガイ山脈を越えようとするが、車道が途切れており断念してイフオール郡に戻り、舗装道を移動してアルハンガイ県ツァヒル郡へ。チンギスハーンの「ナイマンのオールド」候補地を調査。移動してタリアト寺院址を調査し、テルヒン・ツァガーン湖畔泊。

8月9日 アルハンガイ県エルデネマンダル郡に移動し、ハルフル・ハン仏教寺院址を調査。

8月10日 アルハンガイ県ウルズィート郡の龍城遺蹟を經由し、アルハンガイ県ホトント郡のタミリン・オラーン・ホシヨー匈奴墓を經由し、22:00 ウランバートル市に帰還した。総走行距離は2,700キロであった。

②チンギス・ハーンの夏のオールドの試掘調査

8月13日 08:00 白石典之・新潟大学教授、G. ルフンデブ・モンゴル科学アカデミー考古研究所研究員とともにトゥブ県バヤン郡のブルルジュート遺蹟にて試掘調査をおこない、年代比定用サンプルを取得した。19:00 ウランバートル市に帰還した。年代比定用サンプルは解析中である。



ブルルジュート遺蹟での試掘調査

大谷大学真宗総合研究所東アジア・北アジア仏教 研究班とモンゴル国立大学総合科学部との共同調査： モンゴル国ボルガン県、ロシア連邦ブリヤート共和国

東アジア・北アジア仏教研究 研究代表者・教授 松川 節

大谷大学真宗総合研究所東アジア・北アジア仏教研究班とモンゴル国立大学総合科学部との共同研究プロジェクトの2024年度現地調査は、モンゴル国ウランバートル市のモンゴル国立大学とガンダン寺、ロシア連邦ブリヤート共和国ウランウデ市のロシア科学アカデミー・シベリア支部モンゴル学・チベット学・仏教学研究所以及エギトウイスキー・ダツァン寺院を訪問し、「釈迦如来梅檀瑞像」についての共同研究を行った。大谷大学側は松川節研究員（社会学部教授）、モンゴル側は嘱託研究員のS.ヤンジンスレン・モンゴル国立大学科学学部人文系哲学・宗教学科教授）、嘱託研究員のN.アムガラン・ガンダン寺学術文化研究所事務局長・研究員が参加し、2024年8月20日～9月16日の日程で実施した。

8月20日（火）：松川は京都から成田空港へ移動し、13：55成田空港発OM502便にて18：30定刻にウランバートル新国際空港着。タクシーでウランバートル市内のホテルに移動、21：00チェックインした。

8月21日（水）～24日（土）：指定研究班嘱託研究員のN.アムガランおよびS.ヤンジンスレンと連絡をとりつつ、モンゴル国に所蔵される「釈迦如来梅檀瑞像」関連資料の収集と共同研究を行った。「釈迦如来梅檀瑞像」の伝播に関するチベット語とモンゴル語の諸資料のうち最も重要なものはジャンジャ・ホトクト・ロールバイドルジ（1717～1786）の著作であり、チベット語原典とそのモンゴル語訳が伝承されている。今回はアムガラン研究員の協力を得て、ガンダン寺に所蔵されるその異本を閲覧することができた。またヤンジンスレン研究員は著名なモンゴル僧ザワー・ダムディン・ガブジのチベット語著作における「釈迦如来梅檀瑞像」に関する記述の探索において協力を得た。

8月25日（日）～9月3日（火）は別業務（科研基盤B「モンゴル帝国時代における「草原のシルクロード」をつなぐ仏教施設に関する研究」研究代表者：村岡倫・龍谷大学教授）に従事した。9月3日（火）はプーチン大統領のモンゴル訪問に伴い、ウランバートル市内は厳戒態勢となり、移動制限が敷かれた。

9月4日（水）～9月6日（金）はさらに別業務（昭和女子大学・私学学術振興基金「モンゴルのシルクロード遺跡に関する学際的研究——ドグシヒーン・バルガスを中心に」研究代表者：ボルジギン・フスレ・昭和女子大学教授）に従事した。9月6日（金）にはボルガン県セレンゲ郡のインゲト・トルゴイ遺蹟を訪問し、別プロジェクト（モンゴル科学アカデミー考古研究所・ゴロムト銀行「遺産文化の伝統」）にて発掘調査に参加中のアムガラン研究員と出土遺物について意見を交換した。

9月7日（土）・9月8日（日）はアムガラン研究員と「釈迦如来梅檀瑞像」文献に関する共同研究と、ロシア連邦ブリヤート共和国における共同現地調査の打ち合わせを行った。

9月9日（月）：06：30アムガラン研究員とともにウランバートルを専用車で出発。12：45国境のアルタンボラグにてモンゴル国を出国。12：50ロシア連邦入国審査。今回はモンゴル国の自動車でロシア連邦に直接入国したため、まず自動車入国の審査に1時間を要し、その後、松川のみ入国管理事務所に出頭し、入国目的に関するインタビューを受けた。14：45すべての入国手続きをクリアし、無事ロシア連邦ブリヤート共和国に入国した。

18：30ウランウデ市に入り、そのまま市東郊60キロに位置する「草原の遊牧民」ツーリストキャンプまで移動し、21：00到着、宿泊。

9月10日（火）：08：00ツーリストキャンプ発、近くのドライブインで朝食を摂り、200キロ走行して11：20エギトウイスキー・ダツァン寺院着。1900年に北京から運び出されたとされる「釈迦如来梅檀瑞像」を見ることができた。13：00出発。19：40「草原の遊牧民」ツーリストキャンプに帰還、宿泊した。

9月11日（水）：08：00ツーリストキャンプ発、近くのドライブインで朝食を摂り、ウランウデ市内へ向かう。60キロ走行して市内のロシア科学アカデミー・シベリア支所モンゴル学・仏教学・チベット学研究所に11：00到着。ティムジト・ワンチコワ研究員

と面会し、「釈迦如来梅檀瑞像」について意見を交換した。13:00 近隣のレストランで会食。15:00 30 キロ離れたイヴォルガ寺院を訪問。ブリヤート共和国最大の仏教寺院である。16:00 寺院着。17:00 寺院発。18:30 ウランウデ市内の「ホテル・ブリヤーティア」にチェックインした。

9月12日(木):06:00 ホテルをチェックアウトし、モンゴル国境へと向かった。10:15 ロシア側国境着。出国審査は簡単に終わり、10:40 モンゴル側入国審査も簡単に終わり、11:00 モンゴル国内を南下、16:15 ウランバートルに無事帰還した。

9月13日(金):13:00 モンゴル国立大学科学学部人文系列歴史学科のO.オヨーンジャルガル准教授と面会し、「釈迦如来梅檀瑞像」の歴史的背景について意見を交換した。18:00 モンゴル国立大学科学学部人文系列歴史学科のP.デルゲルジャルガル教授、モンゴル国立教育大学のN.スフバートル教授と会食し、「釈迦如来梅檀瑞像」の歴史的背景について意見を交換した。

9月14日(土):宿泊先のホテルで資料整理と記録整理を行った。

9月15日(日):12:00 S.ヤンジンスレン教授と会食し、嘱託研究員としての要務の報告を受け、今後の研究方針について打ち合わせを行った。18:00 在モンゴル・日本大使館の近藤和正次席、モンゴル日本人材開発センター JICA 専門家の滝口良氏と会食し、今次のプロジェクトについて説明して今後の協力を求め、またモンゴル国における外交・内務・対日関係について意見を交換した。

9月16日(月)08:30 モンゴル科学アカデミー考古研究所のB.ツォクトバートル研究員と「釈迦如来梅檀瑞像」の考古学的研究手法について意見を交換した。13:00 定刻にチンギスハーン新空港発 KE198 便で出発し、17:10 にインチョン着。トランジット後、19:05 発 KE721 便で出発し、21:05 定刻に関西国際空港へ到着。全日程を終了した。

ロシア連邦入国に当たっては、ロシア科学アカデミー・シベリア支部モンゴル学・仏教学・チベット学研究所のB.V.バザロフ所長から宿泊施設と交通手段の提供および安全な滞在を保障する招聘状を得た上で、16日間有効な観光ビザをオンラインで取得した。

なお、今次の出張に先立ち、8月12日~14日にブリヤート共和国ウランウデ市で開催された第2回国際仏教徒フォーラム「伝統仏教と現代の課題」会議に参加し「Archaeological Research on the History of Mongolian Buddhism: Results of the Mongolia-Japanese Joint Project」と題してビデオ収録発表(発

表時間15分)を行った。論文は *Буддологические исследования (Buddhist Studies)*, 2024, Ulan-Ude, pp. 101-106 (DOI: 10.30792/2949-5768-2024-8-101-106) に収録された。



エギトウイスキー・ダツァン寺の釈迦如来梅檀瑞像(9月10日)。右はアムガラン研究員。



ロシア科学アカデミー・シベリア支所モンゴル学・仏教学・チベット学研究所にて(9月11日)。左よりワンチコワ教授、松川、アムガラン研究員。

歎異抄ワークショップ参加報告(2024.4.1~2024.9.30)

第13回『歎異抄』翻訳研究ワークショップ

国際仏教研究研究員・准教授 Michael J. Conway
大谷大学大学院修士課程第一学年(真宗学専攻) 佐竹 英里子
大谷大学大学院博士後期課程第二学年(真宗学専攻) 但馬 普

6月28日から30日にかけて、龍谷大学の宮キャンパスにて、第13回『歎異抄』翻訳研究ワークショップが開催された。今回のワークショップは、本学の真宗総合研究所・龍谷大学世界仏教文化研究センター・カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所の三者協定に基づいて、2017年から取り組んでいるプロジェクトの一環として実施された。

本研究班の研究員・嘱託研究員・研究補助員の中、以下の6名が参加した。

井上 尚実(教授・研究代表者)
木越 康(教授・研究員)
Michael J. Conway(准教授・研究員)
Wayne S. Yokoyama(嘱託研究員)
WOO JONGIN(博士後期課程第3学年・研究補助員(RA))
但馬 普(博士後期課程第2学年・研究補助員(RA))

また、本学の大学院の修士課程に所属している以下の2名の学生が参加した。

佐竹英里子(真宗学専攻・第1学年)
手島 英翔(真宗学専攻・第2学年)

なお、海外から来られ、本学を拠点として研究活動に取り組んでいる以下の2名も参加した。

Theo Rai(研修員)
Sepideh Afrashteh(客員研究員)

今までのワークショップの例に則って、翻訳作業は、三つの部会にて行われ、参加者はその部会に別れて、翻訳作業に関する議論をし、翻訳を確定していく形で3日間の日程が進められた。マーク・ブラム(嘱託研究員・カリフォルニア大学バークレー校教授)は、円智の『歎異抄私記』を翻訳する部会の責任者を努め、嵩満也(龍谷大学教授)は寿国の『歎異抄可笑記』、筆者は深励の『歎異抄講林記』の翻訳部会の責任者を務めた。

次世代の研究者の育成が、本プロジェクトの重要な目的の一つであるから、以下において参加した学生の

報告を紹介する。

初めてワークショップに参加した佐竹英里子の報告は以下の通りである。

お恥ずかしながら議論に参加できるほどの英語力はないが、学びの場に身を置きたいと思い、参加させていただいたワークショップは、有意義な経験となった。

日頃「お聖教」として向き合っている『歎異抄』を、異なるバックグラウンドの方たちと、異なる言語で一緒に読むのは新鮮であった。それにより、私自身はどう受けとめているのか?ということ、改めて問われた思いがする。顕著であったのは、他力ありきで読もうとしていることであった。私は言葉を素直に受けとめるのではなく、言葉を通して親鸞聖人のお心を尋ねようとしているのだと。しかしそれは時として、本来の言葉の意味から逸脱することにもなりかねないと知らされました。

例えば、「煩惱具足の身」の「身」をどう訳すかという話しになった時、即身成仏という言葉があるから「body」だと言った方がおられた。私は、この「身」は「fact」ではないかと思った。しかしそれは素直な訳ではないし、そもそも少しズレていると思い、発言はしなかった。結果として、「Their present life is endowed with defilements.」と訳されることになった。

このように「身」という言葉ひとつを取っても、受けとめ方の違いがあり、その受けとめ方の違いを通して、知らされ、気付かされることがある。1日目は英語ネイティブの先生のグループ、3日目は日本語ネイティブの先生のグループに参加したことから、特に統一見解が定められているのではなく、先生によって言葉の訳し方、受けとめが違うことを知れたことも、興味深かった。

また、「往生」を「reborn」と訳すなど、英語表現に関して知ることができたのも、興味深かった。インドにおいて誕生は流転の始まりであると学んだことから、生死の迷いを超えた状態の往生とは矛盾するのは?と、この訳には違和感を覚えた。けれども「re-

born」が往生の訳となっているのは、英語圏の人たちの文化的背景が影響しているのかも知れない。そして同様のことが、サンスクリットから中国語に翻訳された時にも起こったのでは？などと思っていた。

最後になったが、このような学びの機会をいただき有難うございました。

また、本研究班の研究補助員を勤め、本プロジェクトに種々に協力してきた但馬普の報告は以下の通りである。

私は昨年、龍谷大学、及び今年3月にUCバークレーで行われた歎異抄ワークショップに続いて今回が3度目の参加であった。本レポートでは、私が主に参加した寿国の部会での役割と議論について述べる。

私は前回に引き続き3日間を通して寿国の部会を中心に参加した。今回、この部会は第16章の冒頭から翻訳が始まり、最終セッションを前に第16章の翻訳を終えることができた。この部会は主に高先生とライさんが試訳を提示し、それを英語のネイティブスピーカーが理解しやすい英訳表現にするための議論を行い推敲するという形で進行した。ただ、私はヒアリング・スピーキング能力の不足からその議論に直接加わることは難しかった。しかし、私は日本語のネイティブとして主に以下の役割を担った。それは①試訳に原文の内容が全て反映されているのかの確認、②原文読解と③典拠の確認、並びに④古語や漢字、仏教用語の意味の提供の4つであった。

例えば③については、テキストで述べられる聖教の典拠を確かめ、そこでの意味を提示することで、著者の意図を確定させた。第16章に対する寿国の解説には様々な聖教からの引用がなされ、それを織り交ぜることによって講義が編まれている。しかし、第15章とは異なり全く典拠が述べられない上に、『歎異抄』原文ではある程度の分量がある箇所を簡略な一文だけで述べられている箇所が多い。そのため、著者の意図を読み取ることに難儀した。「朝夕」は一時煩惱百千間のゆへにと責むるなり」はその1つで、文意を理解するためには「一時煩惱百千間」が鍵であった。私はこの言葉が善導『般舟讚』を出典とし、親鸞も「化身土巻」に引いていることを調べ、そこでの文脈と意味を提示することで、著者の意図を確定させることに貢献した。

今後の課題として、寿国が引用する聖教の傾向を確かめることが挙げられる。第16章は親鸞からの引用が一番多いことは間違いがないが、それ以外は善導・源信からであった。これは第16章だけの傾向であるのか、それとも講義全体を通じた特徴であるのか。これを調べることによって、寿国がどのような学びをして

いたのか、ひいては江戸時代中期の学寮における学びが明らかになることが期待されるのではないだろうか。

以上の学生の参加報告から、2人にとって、ワークショップに参加し、議論にかかわることによって、親鸞思想に関する基本的な理解を深め、真宗学の基礎的な研究手法を用いることができていることが見て取れる。

今回のワークショップでは、プラム氏が担当する作業部会では、円智の『歎異抄私記』における第14条の注釈の翻訳を完成させた上で、第15条に対する注釈の翻訳作業をも終えた。高氏が統括している部会では、寿国の『歎異抄可笑記』の第16条に対する注釈の翻訳を完成させた。コンウェイが担当している部会では、深助の『歎異抄講林記』における第15条に対する注釈の翻訳を検討し、確定した。

このように翻訳作業が着実に進められているが、パンデミックの最中に締結した協定書において実施することになるので、全ての注釈書の内容を翻訳し終えるために、更に4回のワークショップを開催できるように、三者の機関内で協議を進めている。



寿国部会の様子

真宗総合研究所彙報 2024. 4. 1 ~ 2024. 9. 30

■研究所関係

◇研究所委員会

日 時：2024 年 5 月 29 日 12：20～13：00

場 所：博綜館 5 階 第 4 会議室

- 内 容：1. 特別研究員について
 2. RA（研究補助員）について
 3. 指定研究 研究組織の変更について
 4. 一般研究の発足について
 5. 一般研究（予備研究）について【報告】
 6. その他

日 時：2024 年 7 月 10 日 16：20～17：20

場 所：響流館 4 階 会議室

- 内 容：1. 客員研究員の受け入れ期間延長について
 2. 嘱託研究員の委嘱期間の変更について
 3. 学術交流協定について
 4. タゴール・シンポジウムについて【報告】
 5. その他

日 時：2024 年 9 月 3 日 10：30～11：30

場 所：博綜館 5 階 第 5 会議室

- 内 容：1. 2024 年度研究組織について（チベット文献研究）【報告】
 2. 客員研究員の受け入れ期間延長の取り下げについて【報告】
 3. 特別研究員の委嘱について
 4. 一般研究の発足について
 5. 一般研究（予備研究）の募集について
 6. 2024 年度 研究計画について（宗教・社会研究／東京分室）
 7. PD 研究員の募集について
 8. 学術交流協定（中国社会科学院古代史研究所）について（進捗報告）
 9. 客員研究員の受け入れについて
 10. 『真宗総合研究所紀要』査読・校閲の依頼について
 11. その他

◇2023 年度「特定・指定研究」資料室」研究成果報告会

日 時：2024 年 6 月 26 日 16：30～19：20

場 所：響流館 3 階メディアホール

■特定研究「大谷大学樹立の精神」100 年

【研究会】

日 時 4 月 3 日 16：30-18：00

出席者 一楽真 西本祐攝 大艸啓 戸次顕彰

場 所 真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容 文字起こし原稿の読み合わせと校正ならびに新年度の体制等に関する打ち合わせ

日 時 4 月 8 日 16：30-18：00

出席者 一楽真 西本祐攝 大艸啓 巖城大空

場 所 真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容 文字起こし原稿の読み合わせと校正ならびに新年度の体制等に関する打ち合わせ

日 時 4 月 15 日 16：30-18：00

出席者 一楽真 西本祐攝 戸次顕彰 巖城大空

場 所 真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容 文字起こし原稿の読み合わせと校正ならびに新年度の体制等に関する打ち合わせ

日 時 4 月 22 日 16：30-18：00

出席者 一楽真 西本祐攝 戸次顕彰 巖城大空

場 所 真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容 文字起こし原稿の読み合わせと校正ならびに新年度の体制等に関する打ち合わせ

日 時 4 月 29 日 16：30-18：00

出席者 一楽真 戸次顕彰 巖城大空

場 所 真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容 文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時 5 月 13 日 16：30-18：00

出席者 一楽真 戸次顕彰 巖城大空

場 所 真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容 文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時 5 月 20 日 16：30-18：00

出席者 一楽真 戸次顕彰 巖城大空

場 所 真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容 文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時 6 月 3 日 16：30-18：00

出席者 一楽真 大艸啓 西本祐攝 戸次顕彰 巖城大空

- 場 所 真宗総合研究所プロジェクトルーム
内 容 文字起こし原稿の読み合わせと校正
- 日 時 6月10日16:30-18:00
出席者 一楽真 大艸啓 戸次顕彰 巖城大空
場 所 真宗総合研究所プロジェクトルーム
内 容 文字起こし原稿の読み合わせと校正
- 日 時 6月17日16:30-18:00
出席者 一楽真 大艸啓 戸次顕彰 巖城大空
場 所 真宗総合研究所プロジェクトルーム
内 容 文字起こし原稿の読み合わせと校正
- 日 時 7月1日16:30-18:00
出席者 一楽真 大艸啓 戸次顕彰
場 所 真宗総合研究所プロジェクトルーム
内 容 文字起こし原稿の読み合わせと校正
- 日 時 7月8日16:30-18:00
出席者 一楽真 大艸啓 巖城大空
場 所 真宗総合研究所プロジェクトルーム
内 容 文字起こし原稿の読み合わせと校正
- 日 時 7月15日16:30-18:00
出席者 一楽真 西本祐攝 大艸啓 巖城大空
場 所 真宗総合研究所プロジェクトルーム
内 容 文字起こし原稿の読み合わせと校正
- 日 時 7月22日16:30-18:00
出席者 一楽真 戸次顕彰
場 所 真宗総合研究所プロジェクトルーム
内 容 文字起こし原稿の読み合わせと校正
- 日 時 9月23日16:30-18:00
出席者 大艸啓 戸次顕彰 巖城大空
場 所 真宗総合研究所プロジェクトルーム
内 容 全集・著作・論文調査に関する情報共有と
今後の方針に関する打ち合わせ

■国際仏教研究

【会議】

- ◇国際仏教研究班 全体ミーティング
日 時: 2024年4月18日12時20分~12時50分
場 所: 真宗総合研究所内 ミーティングルーム
参加者: 井上尚実、木越康、Dash Shobha Rani、
Michael J. Conway、新田智通、アマミチ
ヒロ、但馬普

【学会参加】

- ◇2024年9月28日~9月29日
出張先: 龍谷大学大宮キャンパス
要 務: 国際真宗学会第20回大会参加および発表
出張者: 井上尚実、木越康、Michael J. Conway

■EBS (東方仏教徒協会)

- ◇EBS 公開セミナー
日 時: 2024年4月22日14:40~16:10
場 所: 響流館4階会議室
講 師: Michael J. Conway
- 日 時: 2024年5月27日14:40~16:10
場 所: 響流館4階会議室
講 師: Michael J. Conway
- 日 時: 2024年6月24日14:40~16:10
場 所: 響流館4階会議室
講 師: Michael J. Conway
- 日 時: 2024年7月22日14:40~16:10
場 所: 真宗総合研究所ミーティングルーム
講 師: Michael J. Conway
- 日 時: 2024年9月30日14:40~16:10
場 所: 響流館4階会議室
講 師: Michael J. Conway

◇EBS 編集委員会

- 日 時: 2024年4月23日16:30~
場 所: 真宗総合研究所ミーティングルーム
出席者: Robert F. Rohdes、John S. LoBleglio、
井上尚実、Michael J. Conway、
Ama Michihiro、新田智通、David White、
山内美智、筑田一毅、加藤淳、藤枝直子、
岩崎千裕
- 日 時: 2024年9月25日16:30~
場 所: 真宗総合研究所ミーティングルーム
出席者: Robert F. Rohdes、John S. LoBleglio、
井上尚実、Michael J. Conway、
Ama Michihiro、新田智通、David White、
山内美智、筑田一毅、加藤淳、藤枝直子、
岩崎千裕

◇EBS 編集会議

- 日 時: 2024年5月21日16:30~

場 所：EBS 事務局

出席者：Robert F. Rohdes、John S. LoBreglio、
井上尚実、Michael J. Conway、
Ama Michihiro、新田智通、藤枝直子

日 時：2024 年 6 月 25 日 16：30～

場 所：EBS 事務局

出席者：Robert F. Rohdes、John S. LoBreglio、
井上尚実、Michael J. Conway、
Ama Michihiro、新田智通、藤枝直子

■東アジア・北アジア仏教研究

【国外出張】

日 時：2024 年 6 月 7 日～11 日

出張先：中国社会科学院古代史研究所（北京市）

要 務：大谷大学真宗総合研究所と中国社会科学院
古代史研究所との学術協定に基づく共同研究
の実施（在中華人民共和国・北京市）

出張者：松川節・井黒忍

日 時：2024 年 8 月 20 日～9 月 16 日

出張先：モンゴル国ウランバートル市のモンゴル国
立大学とガンダン寺、ロシア連邦ブリヤート
共和国ウランウデ市のロシア科学アカデ
ミー・シベリア支部モンゴル学・チベット
学・仏教学研究所以およびエギトウイスキ
ー・ダツァン寺院

要 務：「釈迦如来梅檀瑞像」についての共同研究

出張者：松川節

【公開研究会】

◇研究会名：「青海クンブム寺におけるモンゴル僧侶
の学修伝統」研究会

日 時：2024 年 4 月 24 日

場 所：響流館 3 階マルチメディア演習室

講演者：アジャ・ゲゲン（元青海クンブム寺座主、
化身仏）

出席者：松川節、井黒忍、松浦典弘、箕浦暁雄、宗
周太郎、A. ボルマー、三宅伸一郎

■大学史研究

【出張】

◇2024 年 5 月 21 日

出張先：大阪工業大学

要 務：全国大学史資料協議会参加

出張者：采翠晃

【大学史研究・全体ミーティング】

◇第 1 回

日 時：2024 年 4 月 10 日 16：30～17：50

場 所：真総研ミーティングルーム

出席者：藤元雅文、西尾浩二、采翠晃、西本祐攝、
名畑直日児、藤井了興

議 題：研究班発足の研究目的、研究計画の確認

◇第 2 回

日 時：2024 年 9 月 24 日 16：30～17：50

場 所：真総研ミーティングルーム

出席者：藤元雅文、西尾浩二、采翠晃、西本祐攝、
名畑直日児、藤井了興、山雄優生

議 題：研究班の前期取り組みの共有、後期取り組
みの確認

【大学史研究関係史料・ミーティング】

◇第 1 回

日 時：2024 年 4 月 18 日 12：20～12：50

出席者：藤元雅文、采翠晃

会 場：真宗総合研究所フリースペース

議 題：今年度の活動方針について

◇第 2 回

日 時：2024 年 4 月 26 日 16：30～17：30

出席者：藤元雅文、采翠晃

会 場：真宗総合研究所フリースペース

議 題：今年度の活動の具体的内容について

◇第 3 回

日 時：2024 年 5 月 10 日 16：30～17：30

出席者：藤元雅文、采翠晃

会 場：真宗総合研究所フリースペース

議 題：大学史資料収集整理の方向性について

◇第 4 回

日 時：2024 年 5 月 24 日 16：30～17：30

出席者：藤元雅文、采翠晃

会 場：真宗総合研究所フリースペース

議 題：大学史資料協議会参加報告

◇第 5 回

日 時：2024 年 6 月 14 日 16：30～17：30

出席者：藤元雅文、采翠晃

会 場：真宗総合研究所フリースペース

議 題：大学史資料収集整理の検討

◇第6回

日時：2024年6月21日16:30~17:30
出席者：藤元雅文、采罌晃
会場：真宗総合研究所フリースペース
議題：大学史資料収集整理の検討

会場：Centre for Buddhist Studies, Visva Bharati,
Santiniketan (インド)、
オンライン (Google Meet)
発表題名：South-east Asian Buddhist Manuscripts
Research Project at Otani University,
Japan.

◇第7回

日時：2024年6月28日16:30~17:30
出席者：藤元雅文、采罌晃
会場：真宗総合研究所フリースペース
議題：大学史資料収集整理の検討

【ドイツ・ハイデルベルク大学との共同研究プロジェクト公開研究発表会】

◇第21回

日時：2024年4月26日
発表者：Dr. Erik Radisch and Dr. Ines Konczak-Nagel
(Sächsische Akademie der Wissenschaften
zu Leipzig)
会場：オンライン (Zoom)
発表題名：Buddhist Murals of Kucha on the Northern
Silk Road

◇第8回

日時：2024年7月5日16:30~17:30
出席者：藤元雅文、采罌晃
会場：真宗総合研究所フリースペース
議題：「保存資料確認表(仮)」の作成検討

【清沢満之研究・ミーティング】

◇第1回

日時：2024年4月19日14:40~16:10
出席者：西尾浩二、西本祐攝、藤井了興
会場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
目的：今年度の活動方針の打ち合わせ

◇第22回

日時：2024年7月26日
発表者：Prof. Yigal Bronner (Hebrew University of
Jerusalem)
会場：オンライン (Zoom)
発表題名：Pandit, Samhita, and the digital future of
Indology

◇第2回

日時：2024年6月20日14:40~16:10
出席者：西尾浩二、西本祐攝、藤井了興、山雄優生
会場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
目的：研究所紀要作成の打ち合わせ

【ミーティング・情報交換】

◇第1回

日時：2024年4月12日19:45~21:30
出席者：ダシュ・ショバ・ラニ (大谷大学)
Dr. Anand Mishra (Heidelberg University,
本班嘱託研究員)
場所：オンライン (Zoom)
内容：目録データベース構築作業

◇第3回

日時：2024年8月1日14:40~16:10
出席者：西尾浩二、西本祐攝、藤井了興、山雄優生
会場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
目的：研究所紀要原稿の打ち合わせ

◇第2回

日時：2024年6月7日18:30~19:30
出席者：ダシュ・ショバ・ラニ (大谷大学)
戸次顕彰 (大谷大学)
筑田一毅 (大谷大学)
Dr. Anirban Dash (Director, NMM)
場所：オンライン (Zoom)
内容：インド系文字の研究に関する出版及び日本
におけるインド系写本調査の協力に関する
会議

◇第4回

日時：2024年9月19日14:40~16:10
出席者：西尾浩二、藤井了興、山雄優生
会場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース
目的：研究班の後期の活動方針の打ち合わせ

■仏教写本研究

【招聘公開講演会】

日時：2024年5月23日
発表者：Shobha Rani Dash (本班研究代表者)

◇第3回

日時：2024年9月28日 21：30～23：30
出席者：ダシュ・シヨバ・ラニ（大谷大学）
Dr. Anand Mishra（Heidelberg University,
本班嘱託研究員）
場所：オンライン（Zoom）
内容：目録データベース構築作業

■宗教・社会研究

【公開研究会】

◇「仏典からいかに意味を抽出するか——仏典研究再考——」

日時：2024年6月24日 14：00～16：00
場所：オンライン（zoom）による開催
講演者：下田正弘（武蔵野大学教授・東京大学名誉教授）
コメンテーター：本多弘之（親鸞仏教センター所長）
出席者：後藤晴子、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央

【ミーティング】

◇第1回

日時：2024年4月15日 13：00～17：00
場所：真宗総合研究所東京分室
出席者：後藤晴子、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央
内容：2024年度指定研究の研究計画（公開研究会・シンポジウム、共同調査）に関する打ち合わせ

◇第2回

日時：2024年5月20日 13：00～17：00
場所：真宗総合研究所東京分室
出席者：後藤晴子、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央
内容：公開研究会に関する打ち合わせ、PD研究員3名による研究発表、個別面談

◇第3回

日時：2024年6月3日 13：00～17：00
場所：真宗総合研究所東京分室
出席者：後藤晴子、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智、藤井麻央
内容：公開研究会の最終確認、PD研究員2名による研究発表、個別面談

◇第4回

日時：2024年6月17日 10：30～16：00
場所：真宗総合研究所東京分室
出席者：後藤晴子、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央
内容：公開研究会事前勉強会

◇第5回

日時：2024年7月8日 13：00～17：00
場所：真宗総合研究所東京分室
出席者：後藤晴子、磯部美紀、澤崎瑞央、高橋泉、藤井麻央
内容：公開研究会の振り返り、共同調査の計画、個別面談

◇第6回

日時：2024年7月29日 13：00～17：00
場所：真宗総合研究所東京分室
出席者：箕浦暁雄、後藤晴子、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央
内容：2024年度指定研究計画書の確認、共同調査の計画、真宗総合研究所主事との意見交換会

◇第7回

日時：2024年8月5日 16：00～17：00
場所：オンライン
出席者：後藤晴子、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央
内容：2024年度指定研究の研究計画の見直し

◇第8回

日時：2024年8月26日 13：00～17：00
場所：真宗総合研究所東京分室
出席者：後藤晴子、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央
内容：公開研究会および公開シンポジウムの計画、共同調査の計画、共同調査の事前勉強会

◇第9回

日時：2024年9月9日 13：00～17：00
場所：真宗総合研究所東京分室
出席者：後藤晴子、磯部美紀、鶴留正智、高橋泉、藤井麻央
内容：共同調査の計画、共同調査の事前勉強会

◇第10回

日 時：2024年9月30日13:00~17:00
場 所：真宗総合研究所東京分室
出席者：後藤晴子、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智、
高橋泉、藤井麻央
内 容：公開シンポジウムの計画、共同調査の最終
確認（インタビュー案の確認）

個人研究班 磯部班

【学会発表・研究会参加】

◇現代民俗学会第73回研究会

日 時：2024年5月20日
場 所：オンライン
要 務：研究会参加
参加者：磯部美紀

◇関西社会学会第75回学術大会

日 時：2024年5月25日~26日
場 所：大和大学
要 務：学会参加
参加者：磯部美紀

◇JARS Early Career Workshop

日 時：2024年6月8日
場 所：東洋英和女学院大学大学院
要 務：研究会参加
参加者：磯部美紀

◇「宗教と社会」学会第32回学術大会

日 時：2024年6月15日~16日
場 所：國學院大學
要 務：学会参加
参加者：磯部美紀

◇親鸞仏教センター第6回「現代と親鸞」公開シンポジウム

日 時：2024年6月29日
場 所：東京大学
要 務：シンポジウム参加
参加者：磯部美紀

◇駒沢宗教学研究会・第201回宗教学研究会

日 時：2024年7月20日
場 所：オンライン
要 務：研究会参加
参加者：磯部美紀

◇東洋英和女学院大学大学院死生学研究所第3回公開連続講座

日 時：2024年7月20日
場 所：オンライン
要 務：研究会参加
参加者：磯部美紀

◇『墓の建立と継承』・『日本とイギリスの自然葬法』合評会

日 時：2024年8月8日
場 所：オンライン
要 務：合評会参加
参加者：磯部美紀

◇第7回アジア未来会議

日 時：2024年8月9日~13日
場 所：チュラロンコーン大学
要 務：学会発表
参加者：磯部美紀

◇2024年度第1回「宗教と社会貢献」研究会

日 時：2024年8月29日
場 所：オンライン
要 務：研究会参加
参加者：磯部美紀

◇日本宗教学会第83回学術大会

日 時：2024年9月13日~15日
場 所：天理大学袖之内キャンパス
要 務：学会参加
参加者：磯部美紀

【出張】

◇2024年6月30日

出張先：パシフィコ横浜
要 務：フューネラルビジネスフェア2024の参加
出張者：磯部美紀

◇2024年8月28日

出張先：東京ビックサイト
要 務：第10回エンディング産業展
出張者：磯部美紀

◇2024年9月27日~28日

出張先：大谷大学、甲南大学
要 務：大谷大学図書館における資料収集、専門的知識の提供、関西社会学会若手企画「死の

社会学」研究会第1回シンポジウムへの参加（討論者）

出張者：磯部美紀

場 所：駒澤大学

要 務：学会発表

参加者：鶴留正智

個人研究班 澤崎班

【学会発表・研究会参加】

◇浄土学研究会第19回学術大会

日 時：2024年6月10日

場 所：大正大学

要 務：研究会参加

参加者：澤崎瑞央

◇第20回国際真宗学会

日 時：2024年9月28日、29日

場 所：龍谷大学大宮キャンパス

要 務：学会発表

参加者：鶴留正智

◇浄土学研修会

日 時：2024年7月1日

場 所：大正大学

要 務：講師

参加者：澤崎瑞央

個人研究班 高橋班

【学会発表・研究会参加】

◇移民政策学会2024年度年次大会

日 時：2024年5月25日～26日

場 所：立教大学池袋キャンパス

要 務：学会参加

出席者：高橋泉

◇第30回真宗大谷派教学大会

日 時：2024年7月6日

場 所：大谷大学

要 務：学会参加

参加者：澤崎瑞央

◇「宗教と社会」学会第32回学術大会

日 時：2024年6月16日

場 所：國學院大學渋谷キャンパス

要 務：学会参加

出席者：高橋泉

◇第75回日本印度学仏教学会

日 時：2024年9月7、8日

場 所：駒澤大学

要 務：学会発表

参加者：澤崎瑞央

◇異文化間教育学会第45回大会

日 時：2024年6月22日～23日

場 所：金沢大学角間キャンパス

要 務：学会参加

出席者：高橋泉

【出張】

◇2024年9月3～5、9～13日

出張先：大谷大学

要 務：仏教学特別セミナー（講師：下田正弘（武蔵野大学教授・東京大学名誉教授））参加

出張者：澤崎瑞央

◇2024年度第1回「宗教と社会貢献」研究会

日 時：2024年8月29日

場 所：オンライン

要 務：研究会参加

出席者：高橋泉

個人研究班 鶴留班

【学会発表・出張】

◇特別展「法然と極楽浄土」観覧

日 時：2024年4月19日

場 所：東京国立博物館

要 務：日本浄土教の宝物類の確認

参加者：鶴留正智

◇日本共生科学会第16回大会

日 時：2024年8月31日

場 所：オンライン

要 務：学会参加、研究発表

出席者：高橋泉

【出張】

◇2024年5月2日

出張先：神奈川県横浜市内O教会

要 務：牧師への聞き取り調査

出張者：高橋泉

◇第75回日本印度学仏教学会

日 時：2024年9月7日、8日

- ◇2024年5月9日
出張先：神奈川県大和市内Y教会
要 務：信者への聞き取り調査
出張者：高橋泉
- ◇2024年5月9日
出張先：浄土宗善然寺内インドシナ難民墓地
要 務：墓地の実態調査、資料収集
出張者：高橋泉
- ◇2024年5月19日
出張先：ラオス文化センター
要 務：ラオス難民への聞き取り調査
出張者：高橋泉
- ◇2024年6月13日
出張先：児童養護施設聖母愛児園
要 務：職員への聞き取り調査、資料収集
出張者：高橋泉
- ◇2024年8月8日
出張先：ファチマの聖母少年の町聖ヨゼフ寮
要 務：職員への聞き取り調査、資料収集
出張者：高橋泉
- 個人研究班 藤井班**
【学会発表・研究会参加】
- ◇第32回近代仏教史研究会
日 時：2024年5月25日
場 所：青山学院大学
要 務：学会参加
出席者：藤井麻央
- ◇「宗教と社会」学会第31回学術大会
日 時：2024年6月15～16日
場 所：國學院大學
要 務：学会参加、研究発表
出席者：藤井麻央
- ◇第63回教学研究会
日 時：2024年6月21日
場 所：オンライン
要 務：学会参加
出席者：藤井麻央
- ◇第6回「現代と親鸞」公開シンポジウム
日 時：2024年6月29日
- 場 所：東京大学
要 務：公開研究会参加
出席者：藤井麻央
- ◇The 6th Annual Conference of East Asian Society
for the Scientific Study of Religion
日 時：2024年7月8日
場 所：麗澤大学
要 務：学会参加、研究発表
出席者：藤井麻央
- ◇駒沢宗教学研究会・第201回宗教学研究会
日 時：2024年7月20日
場 所：オンライン
要 務：公開研究会参加
出席者：藤井麻央
- ◇第21回「メディア宗教」研究会
日 時：2024年7月27日
場 所：オンライン
要 務：研究発表
出席者：藤井麻央
- ◇2024年度 第1回「宗教と社会貢献」研究会
日 時：2024年8月29日
場 所：オンライン
要 務：公開研究会参加
出席者：藤井麻央
- ◇第83回日本宗教学会
日 時：2024年9月14～15日
場 所：天理大学
要 務：学会参加、研究発表
出席者：藤井麻央
- 【出張】**
- ◇2024年6月23日
出張先：京都学・歴彩館
要 務：資料調査
出張者：藤井麻央
- ◇2024年7月23日
出張先：西南学院史資料センター
要 務：資料調査
出張者：藤井麻央

◇2024年8月24日

出張先：三原市立図書館、T教会
要 務：資料調査、見学
出張者：藤井麻央

◇2024年9月14日～15日

出張先：天理大学
要 務：学会参加、研究発表
出張者：藤井麻央

■組織

□研究所委員会

廣川 智貴（研究・国際交流担当副学長、真宗総合研究所長）
箕浦 暁雄（真宗総合研究所主事）
福島 栄寿（大学院人文学研究科長）
山内 美智（教育研究支援部事務部長）
筑田 一毅（教育研究支援課長）
井上 尚実（教授）
Dash Shobha Rani（教授）
松川 節（教授）
三宅伸一郎（教授）
後藤 晴子（准教授）
藤元 雅文（准教授）
戸次 顕彰（講師）

■人事

真宗総合研究所主事

（新）箕浦 暁雄 （旧）藤元 雅文
（2024年4月1日付）

■東京分室 PD 研究

□新規採用（2024年4月1日付）

* 藤井 麻央
* 高橋 泉

□解任（2024年3月31日付）

* 陳 宣聿

■特別研究員

□新規採用（2024年7月31日付）

* 温 秋穎

現 職：任期制助教
研究期間：2024年4月1日～2027年3月31日
研究課題：戦後日本の中国語需要の思想史研究—倉石武四郎と藤堂明保を中心に—

* 高橋 泉

現 職：東京分室 PD 研究員
研究期間：2024年4月1日～2027年3月31日
研究課題：異文化の領域における支援に関する研究—インドシナ難民を中心に—

* 藤井 麻央

現 職：東京分室 PD 研究員
研究期間：2024年4月1日～2027年3月31日
研究課題：教派神道体制下における教会の基礎的研究

研 究 所 報 第 85 号

2025 年 3 月 1 日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435

Email. kenkyusyo@sec.otani.ac.jp

©2025 Otani University Shin Buddhist Comprehensive
Research Institute